

宮城県多賀城跡調査研究所年報1986

多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

多賀城跡に伊東信雄博士が初めて発掘調査のメスをいれたのは昭和 38 年のことであって、本年は早いもので 24 年目を迎える。最初の調査は、当時「内城」と通称されていた箇所が対象であったが、調査着手後まもなく、ここが「政庁」の跡であることが解明された。ところで政庁の前面については、研究所が発足した昭和 44 年に調査したことがあった。しかし顯著な遺構は検出されなかつた。その後南門と政庁の中間部分を調査したところ道路跡が検出された。そこで政庁前面で、かつて調査がおよばなかつた地区を対象とし、本年度第 50 次調査を実施することとした。調査の結果 3 時期の道路遺構が検出され、その幅や細部の構造を把握することが出来た。この調査結果をうけて道路跡を中心としてこの地区的整備工事を実施し、政庁前面地区については面目を一新することが出来た。是非一度ご覧頂きたい。

本年度は第 51 次調査も行った。本次調査は、多賀城跡の東北部で、東辺の外郭築地にはほぼ並行してその東側を南北方向に走る築地跡と、その築地跡に西側から接続する東西方向の築地状の高まりの実態を究明しようとして実施した。その結果、南北方向の築地跡は 8 世紀まで遡りしかも瓦葺きであったことを確認した。さらに東西方向の高まりも瓦葺きではないが、やはり 8 世紀まで遡る築地跡であることが判明した。以上の事実から、多賀城の外郭線は、その位置を時代によって若干変更しているという可能性も考えられるようになってきた。換言するならば、多賀城の全形は、従来考えてきたように、各時代をとおして一定ではなく、やや変化した可能性もあると言うことになる。多賀城跡の調査にとって極めて大きな問題なので、次年度以降さらに調査を重ね慎重に検討して行きたい。

本年度も、多賀城跡調査研究指導委員会、文化庁の諸先生には折りに触れて適切なご指導を頂いた。また県当局、多賀城市の関係各位には種々ご協力を頂いている。このほかにも多くの方々に当研究所の業務に対してご理解とご援助を頂いた。以上の方々に深く感謝の意を表し序文としたい。

昭和 62 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 佐々木 光雄

目 次

I 調査の計画	1
II 第49次調査(昭和60年度分)	3
1 調査経過	3
2 基本層序	4
3 発見された遺構と遺物	5
4 考察	24
III 第50次調査	29
IV 第51次調査	34
1 調査経過	34
2 層序	39
3 発見された遺構と遺物	41
4 考察	54
V 付 章	61
1 関連研究・普及活動	61
2 研究成果刊行物	62

図 版

例 言

1. 本書は昭和61年度に実施した多賀城跡第50次調査の概要と第51次発掘調査の報告、および昨年度年報では概要のみを記載した昭和60年度の第49次調査の報告を収録したものである。
2. 発掘調査の測量原点は政府正殿跡(SB150B)の南入側柱列の中央に埋設したコンクリート柱である。この原点と政府南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線と定めた。南北の基準線の方向は真北に対して $1^{\circ} 04'00''$ 東に偏している。この数値は前年度までの年報と異なっているが、本年度に実施した多賀城跡地形図作成に伴い正確な計測値が得られたため、ここで修正しておきたい。
3. 遺構の位置は、南北・東西の基準線からの距離で示すこととし、例えば南北の基準線から東へ50mの位置はE50ないしE50mのように記している。
4. 土色については『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄: 1976)を参照した。
5. 本書の作成にあたっては、当研究所の佐々木光雄、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、丹羽茂、古川雅清、後藤秀一が協議、検討を行い、執筆・編集はIを高野、IIを丹羽、IIIを高野、IVを丹羽、Vを高野が担当した。これらの作業を古川淳一、菅原祥夫、田仲紀美子、浅野浩美、多田玲子、馬場ひろみ、大山純子、小林史子、富士宏子、岡田富子が援けた。また、人骨の同定については宮城県教育庁文化財保護課 阿部恵氏の教示を得た。

I 調査の計画

昭和 61 年度は多賀城跡発掘調査第 4 次 5 ヶ年計画に基づく 3 年次にあたり、政庁南前面地区（第 50 次）と外郭線北東隅地区（第 51 次）の 2 地区を対象として実施した。第 50 次調査の目的は政庁南門から外郭南門に通する道路の構造と変遷を把握すること、また第 51 次調査の目的は、外郭北東隅付近から東へ延びる築地状の高まりとその東で A 字状に接続する築地跡の性格を解明することにあった。本年度の調査実施地区と実施状況は第 1 図・表 2 に示したとおりである。このほか、年間を通して遺構データと出土遺物の整理を行った。発掘調査事業費の総計は 29,000 千円（うち 50% 国庫補助）である。

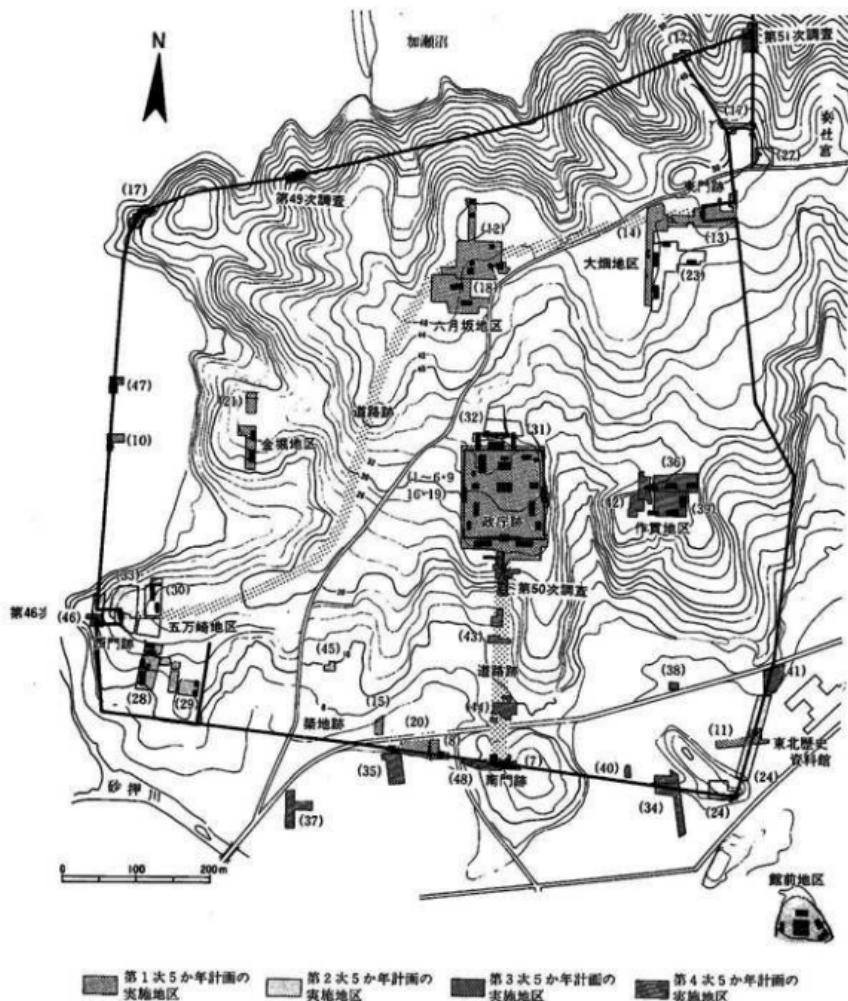
なお、第 4 次 5 ヶ年計画については、改訂案を昭和 60 年の第 21 回多賀城跡調査研究指導委員会に諮り承認されている（表 1）。

年次	計画 (昭和 59・60 年度は実績)		
	次 数・発掘調査地区	調査面積	予算
59 年度	(1) 第 45 次 坂下地区	70 m ²	1,820 m ² 29,000 千円
	(2) 第 46 次 外郭西門地区	750 m ²	
	(3) 第 47 次 外郭線西辺中央部	1,000 m ²	
60 年度	(1) 第 48 次 外郭南門地区	800 m ²	1,250 m ² 29,000 千円
	(2) 第 49 次 外郭北門推定地	450 m ²	
61 年度	(1) 第 50 次 政庁南前面地区	1,000 m ²	2,000 m ² 35,000 千円
	(2) 第 51 次 外郭線東北隅地区	1,000 m ²	
62 年度	(1) 第 52 次 大烟地区及び東辺外の地域	1,000 m ²	2,000 m ² 35,000 千円
	(2) 第 53 次 外郭東門北東部（外郭外）	1,000 m ²	
63 年度	(1) 第 54 次 外郭東辺築地（作貫地区）	1,000 m ²	2,000 m ² 35,000 千円
	(2) 第 55 次 奏社宮西辺築地（大久保地区）	1,000 m ²	
計	10 地区		9,070 m ² 163,000 千円

表 1 多賀城跡発掘調査第 4 次 5 ヶ年計画（昭和 60 年 4 月 26 日一部改訂）

調査次数	調査地区	面積	期間
第 50 次	政庁南地区	900 m ²	5 月 6 日～10 月 17 日
第 51 次	外郭線東北隅地区（外郭外）	500 m ²	9 月 6 日～12 月 5 日
計	2 地区	1,400 m ²	

表 2 昭和 61 年度発掘調査実績表



第1図 多賀城跡調査実施地区 () は調査実数

II 第49次調査

1. 調査経過

第49次調査は多賀城市市川字丸山22のうち約500m²を対象として実施した(第2図)。調査地区は六月坂(政庁北側)の西隣にある舌状の丘陵で、緩やかに外郭線の北側に延びている。第49次調査は第4次5ヶ年計画の第2年次として、外郭北辺区画施設の構造と変遷を調査する目的で昭和60年8月1日から12月17日まで実施した。また、東・南・西門が丘陵尾根上に築かれていることなどから、位置・地形などの点で、北門の推定地として最も有望視されていた所である。今回の調査では門遺構こそ発見されなかったものの、外郭北辺区画施設が築地であることを確認した。

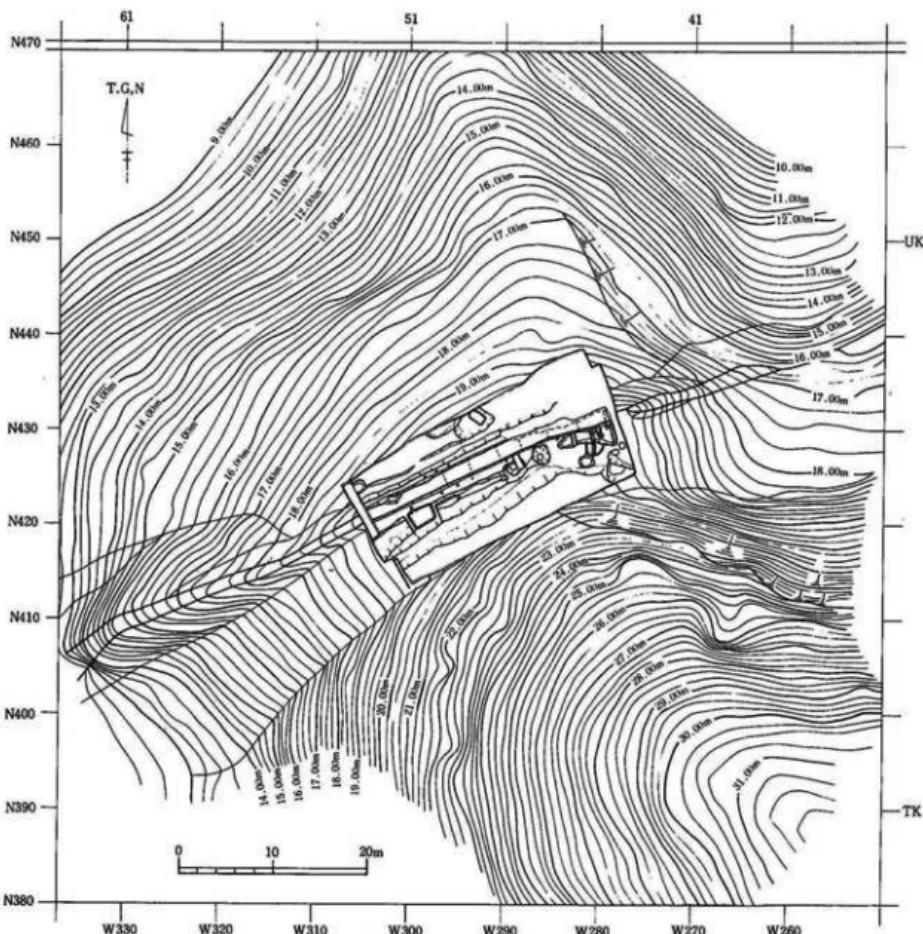
調査は7月に、六月坂地区に設定してある基準点から原点を移動し、調査区を設定することから始めた。また、原点移動と併行して、調査区周辺の現況測量図(7,000m²)を縮尺1/200で作成した。そして、8月1日に発掘器材を運搬し、8月2日から粗掘りを開始した。当初、粗掘りは築地状高まりを中心として、その両側の約700m²を対象として実施した。粗掘りの過程で築地本体上部と築地南側のSD1580溝を検出したが、外郭南門の調査(第48次調査)が精査段階に入ったため、北辺の調査は一時中断することにした(8月12日)。調査を再開したのは11月25日である。季節が秋冷の頃に入り、冬も間近になったため、霜柱による遺構の損壊を考慮し、調査期間・調査面積を縮小して(約450m²)実施することにした。

発掘を進めるにしたがって、築地両側に堆積している層から掘り込まれた竪穴住居跡・屋外カマド跡・土壤を検出した。また、築地南側堆積土を検討したところ、第4層が築地本体上部を覆うことから、土壘として再構築されたのではないかと推定した。しかし、その後の検討の結果、土壘とはみなしがたいという結論に至った。また、築地南側の基底部に沿って凝灰岩礫を多量に含む暗褐色土(第8層)が堆積していた。調査の時点では、築地構築に際して本体基底部を保護するための盛土層である可能性を考慮し、この時点での平面実測図を縮尺1/20で作成し、写真撮影を行った。

次に、築地南側の第8層を取り除き、築地の精査を行い、積み手の違い・柱穴などを検出した。また、築地築成土・構築方法などを調べるために、調査区の東端と西端で断ち割り調査を実施した。全体の精査が終了した段階で、その内容を盛り込んだ補足図面を作成し、写真撮影を行った。調査が終了したのは12月17日である。その後、調査区の埋め戻しを行い、一切の野外作業を終えたのは1月である。

2. 基本層序

調査区内の基本層序は次のようなになる。第Ⅰ層：表土（褐色シルト）、第Ⅱ層：旧表土（褐色 10YR4/4 シルト）、第Ⅲ層：地山。第Ⅲ層の上部は地山土（黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト）で、部分的に凝灰岩礫を含む。下部は岩盤（凝灰岩）である。



第2図 発掘調査区と周辺の地形

3. 発見された遺構と遺物

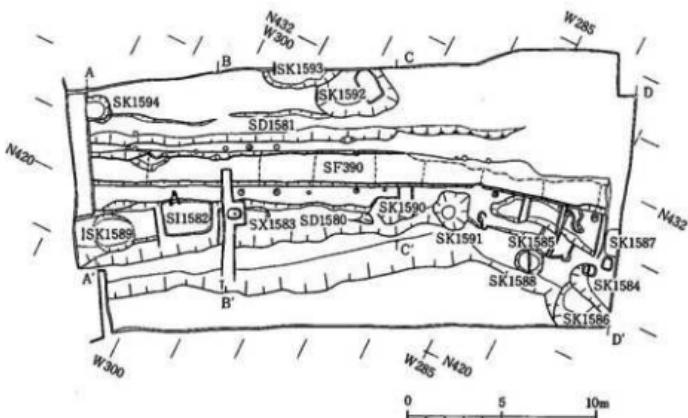
今回の調査で発見された遺構には築地跡1、溝2、竪穴住居跡1、屋外カマド跡1、土壙11がある(第3図)。また、築地の南側には第2~8層、北側には第2~6層が堆積している。これらの遺構・堆積層および基本層位第I層からは土器(土師器・須恵器・須恵系土器)・瓦(軒平瓦・平瓦・丸瓦)・輪の羽口が出土している。ここでは、遺構・堆積層の特徴とその出土遺物について述べる。なお、土器については復元可能なもの、口縁部・底部資料の中で特徴的なものを図で示し、その他の破片資料は表1にまとめた。瓦についてもほぼ同様な扱いをしたが、表には図示したものも含めてある(表2)。

(1) SF390 築地とその関連施設

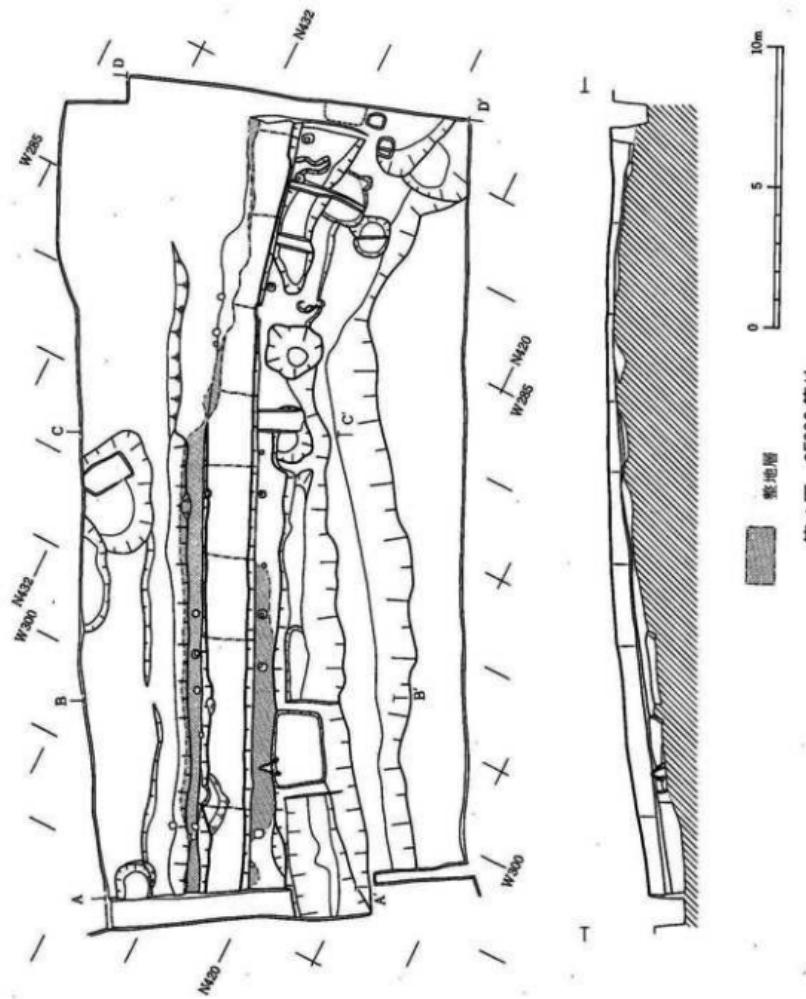
今回調査を行った丸山地区の北辺築地(SF390)は、北へ延びる丘陵の尾根とその東・西斜面に構築されている。発掘調査によって、東西約30mにわたって築地本体とその基礎および両側の溝(SD1580・1581)を検出した(第3~5図)。

築地跡: 築地本体の残存高は西側斜面部分が60~90cm、尾根および東側斜面部分が20~40cm、全体的に斜面部分で保存が良く、尾根部分で削平や崩壊が著しい。

築地本体の残存基底幅は、保存の良い積み手違いの部分で、西側から1.9m・1.87m・1.8m・1.85mで、築地を断ち割ったA-A'・D-D'では1.8mであった。これらのことから築地本体の基底幅は1.85m前後と推定される。



第3図 遺構配置図



第4図 SF390繁地

築地本体における積み手の違いは、築地北側で西から 5.9m・3.0m・3.1m、築地南側で西から 6.0m・2.9m・3.3m・2.5m・3.1m・3.3m・2.9m 間隔で検出され、ほぼ 3m を単位としているものと考えられる。

築地本体の積み土は調査区西端の A-A' で見ると厚さ 5~8 cm 前後の褐色粘土質シルトと(にぶい)黄褐色シルトの互層で、版築によって本体を構築している。いずれの層も、凝灰岩礫 (2~4 cm) を多量に含み、全体にしまりがある。調査区東端の D-D' では厚さ 8~40cm の橙色・黄褐色・褐色・暗褐色粘土質シルトで版築し、本体を構築している。A-A' 部分の本体に較べ、含まれる凝灰岩礫が大きく (2~7 cm)、量も多く、またしまりも弱い。

築地本体両側で検出されたピットは北側が 6 個、南側が 8 個である。このなかで、柱痕跡が確認されたのは北側 1 個、南側 6 個である。これらはほぼ方形で、大きさ 30cm、深さ 20cm 前後で、規則性がみられる。柱痕跡は確認できなかったものの、同様な形・規模をもつものが北側に 2 個みられ、これらも柱穴と考えられる。これらの柱穴は築地本体基底部からいすれも 10cm 前後離れており、本体の積み手違い付近の両側で対になった位置にあるものが多い。したがって、これらは築地に伴う寄柱穴や足場組穴とは考えられず、構築時の仮枠板を押された柱穴と推定される。このため、本築地は寄柱のない構造のものと考えられる。

築地は丘陵尾根を境にして屈曲しており、その方向を本体南側基底部で計測すると、東西発掘基準線に対して、尾根の東側部分が東で 13°、西側部分が東で 26° 北に偏っており、その挾角は 167° である。このように築地が丘陵尾根部分で屈曲しているのは、地形の制約などによるものと考えられる。

なお、本築地については、構築後の補修痕跡や構築に伴う柱穴の重複がみられないことから、一時期のものと推定される。本築地から遺物は出土していない。

築地に関連する施設：築地本体の両側には SD1580・1581 溝があり、その部分の築地基礎は溝によって削りだされて、基壇状になっている。しかし、築地南側の SD1580 溝は東端が尾根付近の SK1590 土壙部分で途切れ、北側の SD1581 溝も尾根付近から東側の大部分が削平されているため、平面的に検出できたのは西側斜面の長さ 15m の範囲である。検出部分における犬走りの幅は南側が 0.8~0.9m、北側が 0.4~0.6m である。また、築地基礎は尾根部分では地山まで削平整形し、斜面部分では旧表土上に盛土整地している。盛土整地の厚さは、築地本体南側では 10cm 以下と薄く、北側では 10~20cm と厚い。このような築地基礎のありかたは、横断方向におけるほぼ水平な平坦面を確保するためであったと考えられる。なお、犬走り面は縦断方向で西に低く傾斜しており、築地南側で長さ 10m

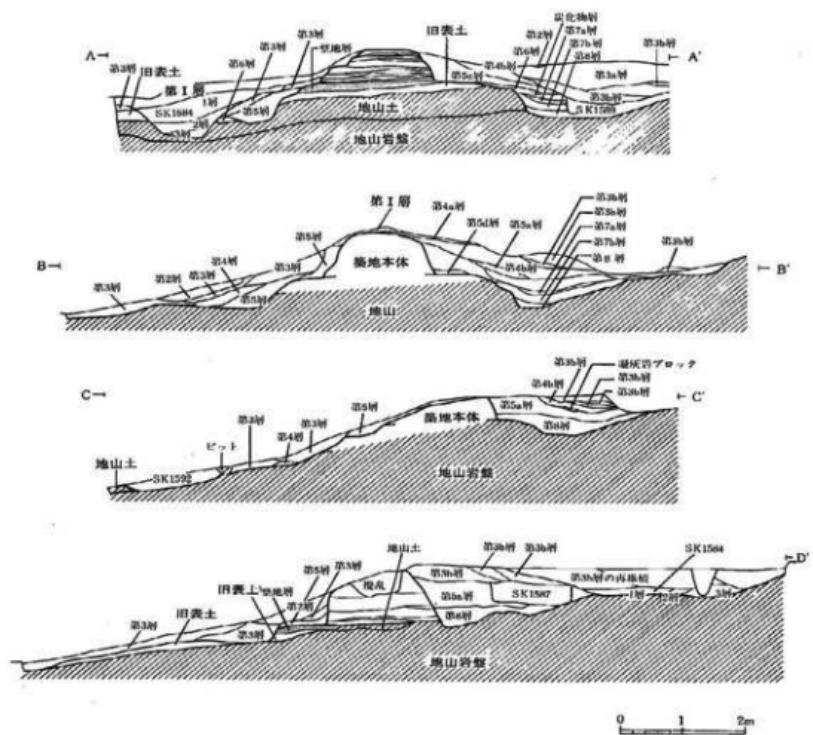


図5 図 築地断面

築地北側堆積土		
層位	特	徴
第1層	褐色シルト 表土	
第2層	褐色(10YR4/4)シルト 塗灰岩繊多量に含む	
第3層	褐色(10YR4/6)シルト サラサラしている	
第4層	褐色(10YR4/6)シルト 塗灰岩繊多量に含む	
第5層	に赤い黄褐色(10YR5/4)シルト 塗灰岩繊多量に含む	
第6層	に赤い黄褐色(10YR4/3)砂質シルト 明黄褐色粘土質シルト含む	
築地南側堆積土		
層位	特	徴
第1層	褐色シルト 表土	
第2層	灰白色火山灰	
第3層	黃褐色(10YR5/6)シルト サラサラしている	
第4層	に赤い黄褐色(10YR5/4)シルト 塗灰岩繊を含む	
第5層	暗褐色(10YR3/4)シルト 塗灰岩繊を少量含む	
第6層	灰褐色(10YR6/2)砂質シルト 塗灰岩繊を含む	
第7層	褐色(10YR4/6)シルト サラサラしている	
第8層	に赤い黄褐色(10YR5/4)シルト 塗灰岩繊を含む	■に含む

第5図 築地断面

で 0.87m の落差がある。

築地南側の SD1580 溝は西側斜面において長さ約 15m にわたって検出した。幅は 0.8m ~ 3.2m 、深さ 0.4~0.6m で、西に向かって徐々に幅が広く、深さも増している。溝の横断面は上部で開く「U」字状で、縦断面は西へ向かって低く傾斜している。また、SD 1580 溝および築地本体南側の丘陵斜面は、築地にそった形で削平整形されており、築地本体南側基底部からの幅は 4.4~4.9m とほぼ一定している。溝内には第 8 層から第 6 層が堆積している。

築地北側の SD1581 溝は、西側斜面に残存している長さ 16m の部分を検出した。幅は約 1.5m である。溝南壁側の深さは 30~40cm で、築地基礎を基壇状に削り出している。溝北壁側の深さは 10cm 以下である。このため、溝の横断面は南壁側が深い「J」字状をしている。溝の縦断面は西に向かって低く傾斜している。溝内には第 6・5 層が堆積している。

これらの築地両側にみられる溝の性格としては、犬走りの形成・排水・土取りなどが考えられる。

(2) 築地両側の堆積土

築地南側には第 2~8 層、築地北側には第 2~6 層の堆積土がみられる。それらはいずれも築地の崩壊などに伴う自然堆積土で、その堆積過程において各種の遺構が構築されている。ここでは、各層の特徴と遺構との関係、さらには各層における出土遺物について述べる。なお、説明は築地南側と北側に分け、下層から行うこととする。

築地南側の堆積土とその出土遺物

第 8 層：凝灰岩礫を多量に含む暗褐色（10YR3/4）シルトで、中央部から東側の築地ぎわと犬走りに堆積している層と、西側の SD1580 溝底面に堆積している層がある（第 6 図）。両層は層相としては共通するが、東側の層が西側の層に較べてやや明るく、含む凝灰岩礫の量も僅かに多い。両層の新旧関係は、分布が異なるため把握できなかったが、築地の初期崩壊土という点では共通している。また、東側の層は SK1590・1591 土壙を覆っており、土壙上部では窪んでいるものの、全体として上面が平坦なことから、自然堆積の後、搔きならされた可能性がある。さらに、西側の層はその段階で、犬走りから SD1580 溝に搔き落とされたものかと考えられる。東側では第 8 層上面で SK1585 土壙が検出されている。遺物は出土していない。

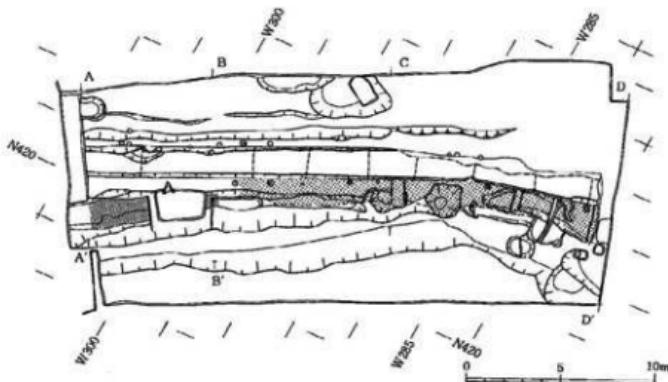
第 7 層：褐色（10YR4/6）シルトの第 7 a 層と、にぶい黄褐色（10YR5/4）シルトの第 7 b 層があり、第 7 b 層は凝灰岩礫を含む。いずれも西側に分布している。遺物は出土していない。

第6層：灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルトで凝灰岩礫を含む。木炭・焼土を薄い層状に含む部分があり、西側に分布している。第6層上面ではSK1589土壌が検出された。遺物は出土していない。

第5層：褐色（10YR4/6）シルトの第5a層と、にぶい黄褐色（10YR5/4～3）シルトの第5b～d層に大きく分かれる。第5a層はサラサラしており、凝灰岩礫をほとんど含まない。第5b層は凝灰岩礫を多量に、第5c層は凝灰岩細粒を多量に、第5d層は凝灰岩細粒を少量含むという特徴をもっている。また、この第5a～d層の分布にはかなり偏りがある。すなわち、第5a層はSI1582住居跡よりも東側に、第5b層はSI1582住居跡周辺に、第5c層はSI1582住居跡周辺から西側に、第5d層はSI1582住居跡周辺に堆積している。第5層において検出された遺構にはSI1582住居跡とSK1587土壌がある。SI1582住居跡は第5c層上面において検出したが、第5a・b層との関係については確認できなかった。SK1587土壌は第5a層上面で検出した。

第5層の出土遺物には土器・瓦・輪の羽口がある（第7図）。土器には土師器坏体部1点、須恵器坏口縁部1点、同坏底部（ヘラ切り）2点（第7図6・7）、同甕口縁へ肩部1点（8）、同甕胴部2点がある。瓦には焼けた丸瓦玉縁部2点がある。輪の羽口は2点ある。そのうち1点は先端部が良く残っている（9）。

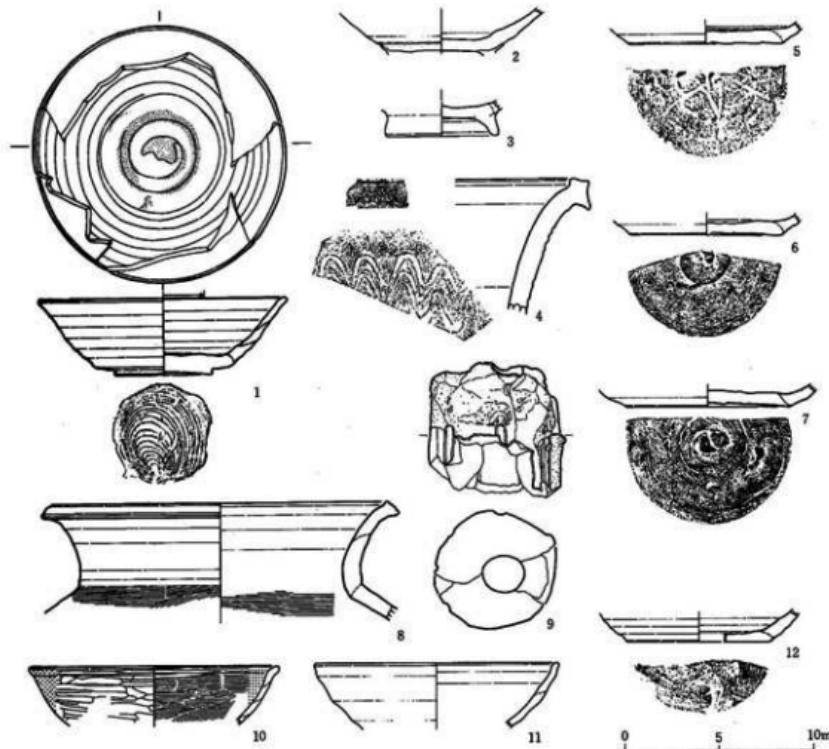
第4層：黄褐色（10YR5/8）シルトの第4a層と、黄褐色（10YR5/6）シルトの第4b層に分かれる。両層とも多量の凝灰岩礫を含む。第4層はA-A'からC-C'付近に分布し、B-B'で最も保存が良い。B-B'における第4層の堆積状況をみると、築地本体の中央



第6図 第8層の分布

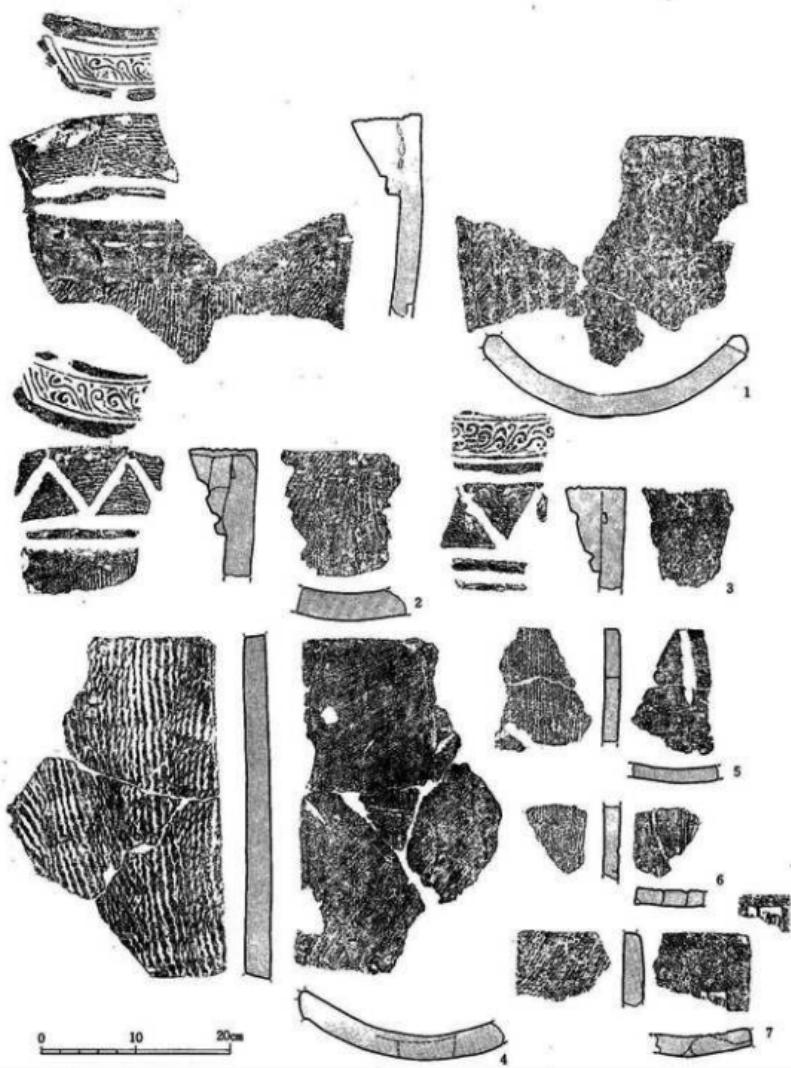
部付近まで及んでいる。このような堆積状況は他の層にみられない特徴的なものである。その理由は、築地本体が第4層に覆われた部分まで崩壊していたのか、第4層堆積後整地が行われ、それが築地本体に及んだためかと考えられる。

第4層からは焼けた平瓦II B類（第II期）が1点、第4層上面からは須恵器甕胴部1点が出土している。



番号	層	紋	種類	圖	番号	層	紋	種類	圖
1	築地南第3層	須恵器甕	底面磨減 軽用窓か	7	築地南第5層	須恵器甕	ヘラ切り		
2	築地南第1層	須恵器土器	高台甕	8	築地南第5層	須恵器甕	口縁・頸部：ロクロナデ 脊部：ナデ		
3	築地南第1層	須恵器土器	高台甕 回転系切り	9	築地南第5層	輪羽口	口部周辺：火墨れ 脊部に沈線		
4	築地南第1層	須恵器甕	波状文	10	築地北第2層	土師甕	外面：ミガキ 内面：ナデ 内外面：黒色		
5	築地南第1層	須恵器甕	ヘラ切り	11	築地北第2層	須恵器土器	内外面：ロクロナデ		
6	築地南第5層	須恵器甕	ヘラ切り	12	築地北第2層	須恵器甕	回転系切り		

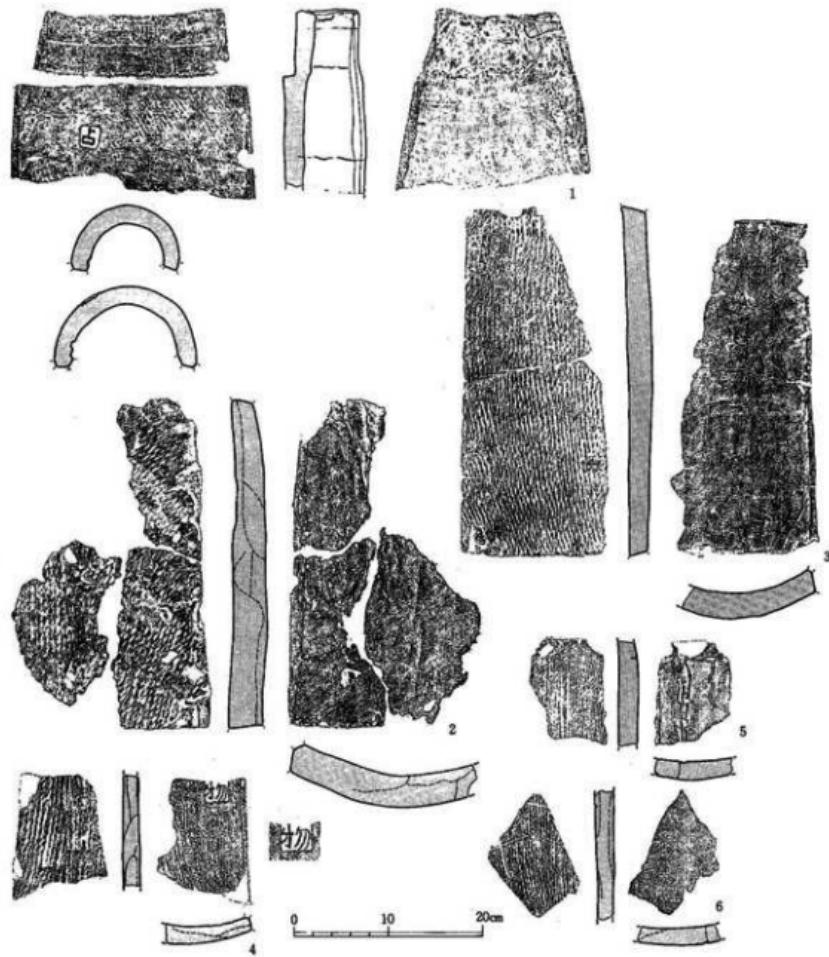
第7図 築地堆積土出土遺物 [I]



番号	層位	種類	備考	4	5	6	7
1	埴地相隔Ⅰ層	斜平瓦	刀刃形・切・凸面：縹跡水・凹面：丸目・一箇十一	6B類 凸面：縹跡き 四面：希切痕張・丸目・ナゾ	6C類？ 縹作り・凸面：縹跡き 四面：丸目		
2	埴地相隔Ⅰ層	斜平瓦	刀刃形 備：縹跡文・凸面：縹跡跡 縹跡面：ヘラ 縹跡跡 四面：丸目・一箇ナゾ	6	6A類Ⅰ層 平瓦	6C類？ 縹作り・縹合せ目ナゾフタ 凸面：縹跡き 四面：丸目	
3	埴地相隔Ⅱ層	斜平瓦	721番 強：縹跡文・縹跡き 四面：丸目・ナゾ	7	6A類Ⅰ層 平瓦	6E類 凸面：縹跡き 四面：縹威・縹印：■	

第8図 築地堆積出土遺物 [II]

第3層：褐色シルトでサラサラしている。第3層については西端付近に堆積している第3a層（褐色10YR5/6）と、築地ぎわ全体に堆積している第3b層（10YR4/4~6）がある。



番号	圖 位	種類	備 考	番号	測 定	種類	備 考
1	施設東側3箇	丸瓦	背面：凸面；調印：ナメ、斜印□；前面：布目	4	施設北側2箇	平瓦	凸面：調印；前面：ナメ、斜印□
2	施設北側1箇	平瓦	■有筋；正面：調印；背面：赤土引風、布目、ナメ	5	施設北側3箇	平瓦	斜印△；結合合せナメフリ；正面：調印△；背面：布目
3	施設北側3箇	平瓦	■有筋；正面：調印；背面：赤土引風、布目、一般ナメ	6	此	平瓦	凸面：調印△；ヘラ書き；前面：布目

第9図 築地堆積土出土遺物 [Ⅲ]

第3 b層上面で検出された遺構には、SX1583 屋外カマド跡と SK1584 土壙がある。なお、東端部分では SK1584 土壙を覆う第3 b層の再堆積層がある。

第3層の出土遺物には土器と瓦がある（第7～9図）。土器には土師器杯体部2点、同杯底部2点、同甕口縁部2点、同甕胴部8点、須恵器杯復元資料1点（第7図1）、同杯口縁部1点、同杯底部（手持ちケズリ）1点、同瓶胴部2点、同甕胴部20点、須恵系土器杯口縁部1点、同杯底部1点がある。第7図1の須恵器杯は底部切り離しが回転糸切りのもので、底部内面が磨滅し、墨の痕跡らしいものがあり、転用硯と考えられる。瓦には軒平瓦721A（第III期1点 第8図3）、平瓦IA類（第I期1点）、平瓦IB類（第II期9点 第8図4、第II～III期3点、第III期15点）、平瓦IC類（第IV期4点）、丸瓦（玉縁部5点 第9図1、端部7点、側縁3点、筒部6点）がある。第9図1の丸瓦筒部凸面には占の刻印がある。

第2層：灰白色火山灰で、調査区西端において2～3cmの厚さで確認したが、その分布範囲は狭い。また、この灰白色火山灰はSK1586 土壙でも確認されたが、降灰後大部分は流出し、窪地の部分で僅かに残ったものと思われる。

築地北側の堆積土とその出土遺物

第6層：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルトで、明黄褐色（10YR6/6）粘土質シルトを含む。調査区西端付近のSD1581溝北側に堆積している。遺物は出土していない。

第5層：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルトで、凝灰岩粒を多量に含んでおり、築地ぎわ全体に堆積している。

遺物としては、土器と瓦がある。土器には、土師器杯体部1点、同杯底部1点、須恵器杯口縁部1点、同甕胴部1点、同甕細片1点がある。瓦には平瓦IB類（第II期1点、第II～III期1点、第III期1点）、丸瓦端部1点がある。

第4層：褐色（10YR4/4）シルトで、凝灰岩礫を多量に含んでいる。築地ぎわの中央部に堆積している。遺物は出土していない。

第3層：褐色（10YR4/6）シルトで、サラサラしている。築地ぎわに堆積しているが、分布の幅は狭い。第3層上面で確認された遺構にはSK1592・1594 土壙がある。

出土遺物には、平瓦IB類（第II期1点、第II～III期1点 第9図3、第III期4点）、平瓦IC類（第IV期3点）、紐作りのもの（時期不明1点 第9図5）、丸瓦（玉縁部5点、側縁2点）がある。

第2層：褐色（10YR4/4）シルトで、凝灰岩礫を多量に含み、B-B'・D-D'付近に堆積している。

出土遺物には土器と瓦がある。土器には土師器杯復元資料1点（第7図10）、同杯体部1

点、同杯底部 2 点、須恵器杯口縁部 1 点、同杯底部 1 点（回転糸切り 第 7 図 12）、同甕胴部 1 点、須恵系土器杯復元資料 1 点（第 7 図 11）がある。第 7 図 10 の土師器杯は、体部が内湾ぎみに外傾し、口縁部が外反するもので、内外面ともヘラミガキと黒色処理がなされている。瓦には平瓦 II B 類（第 II 期 第 9 図 4）1 点、丸瓦玉縁部 1 点、側縁 1 点がある。第 9 図 4 の平瓦凹面には物 A の刻印がある。

基本層位第 I 層の出土遺物

築地南側：出土遺物には土器・瓦がある。土器には土師器杯底部（回転糸きり）1 点、同甕口縁部 1 点、同甕胴部 4 点、須恵器杯底部 5 点（回転糸切り 2 点、ヘラ切り 3 点 第 7 図 5）、同瓶肩～胴部 1 点、同甕口縁部 1 点（第 7 図 4）、須恵系土器杯口縁部 1 点、同杯底部 1 点、同高台杯 3 点（第 7 図 2・3）がある。瓦には軒平瓦 720・721A（第 III 期各 1 点 第 8 図 1・2）、平瓦 I A 類（第 I 期）1 点、平瓦 II B 類（第 II 期 8 点 第 8 図 7、第 II～III 期 11 点、第 III 期 13 点）、平瓦 II C 類（第 IV 期）11 点、紐作りの平瓦（第 8 図 5・6）2 点がある。第 8 図 7 の平瓦凹面には物 A の刻印がある。

築地北側：出土遺物には土器・瓦がある。土器には土師器杯体部 3 点、同甕口縁部 1 点、須恵器杯底部（ヘラ切り）1 点、同甕胴部 4 点がある。瓦には平瓦 II B 類（第 II～III 期 1 点 第 9 図 2、第 III 期 5 点）、II C 類（第 IV 期）4 点、丸瓦（玉縁部 1 点、端部 2 点、側縁 2 点、筒部 3 点）がある。

（3）竪穴住居跡・屋外カマド跡・土壤

SI1582 竪穴住居跡（第 10 図）

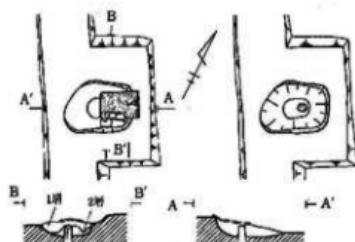
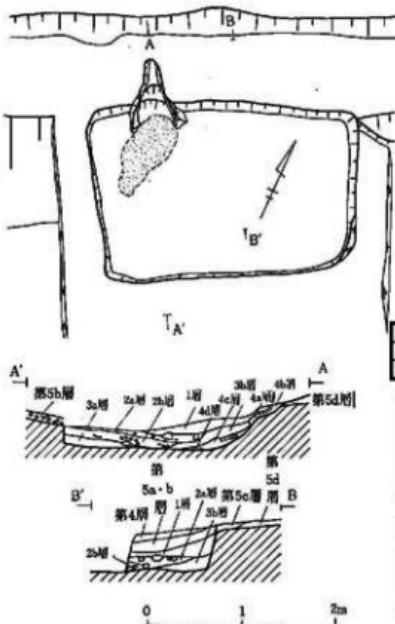
遺構：築地南側の西斜面において、第 5 c 層上面で検出した。第 4 層に覆われるが、第 5 a・b 層との関係は把握できなかった。また、本住居跡は築地南側の犬走り部分まで掘り込んで構築されている。平面形はやや歪んだ長方形で、規模は長軸 2.64m、短軸 1.74m である。住居長軸の方向は、東西発掘基準線に対して東で 25° 北に偏っている。床面は掘り方底面と同じで、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁の残存高は東壁が 30～50cm、南壁が 10～50cm、西壁が 10～21cm、北壁が 6～21cm である。

カマドは北壁の西側中央に設置されており、燃焼部と煙道部からなる。全体の規模は長さ 80cm、幅 60cm である。燃焼部は奥壁を住居壁の外側へ僅かに（約 15cm）掘り込んだもので、側壁を粘土積み上げで構築している。規模は幅 35cm、奥行 50cm である。煙道部は天井が煙道内に落盤している（4 a 層）ことから、掘り抜き式と推定される。残存している煙道は上方に傾斜（約 30°）し、先端で立ち上がり、煙り出しとなる。煙り出しが下端が僅かに残っていただけで、上方は確認できなかった。煙道の規模は、残存している部分で幅 20cm、長

さ45cm(燃焼部と重複している部分15cm)である。なお、燃焼部の焚き口から手前にかけて、焼土・木炭などが分布していた。

この他、壁材・柱穴・周溝などの施設は検出されなかった。

堆積土と出土遺物：住居内堆積土は4層に分かれる。1～3層は住居跡全体に、4層はカマド内に堆積している。1層はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルトで、凝灰岩礫を含み、住居跡北側の最上層として、堆積している。2層は多量の凝灰岩礫を含む層で、a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト、b層：褐色(10YR4/4)シルトに細別される。両層とも北壁付近を除き、住居跡全体に堆積している。3層は凝灰岩粒を含む層で、a層：褐色(10YR4/5)シルトとb層：にぶい黄橙色(10YR6/4)シルトに細別される。a層は南壁側に、b層は北壁付近に堆積している。4層はカマド内堆積土で、a～d層に細別される。a層は暗赤褐色(5YR3/4)シルトで、黒焦げに焼けた煙道部天井の落盤したものと推定される。b層はその下にある煙道内堆積土で、明黄褐色(10YR6/6)の細砂質シルトである。c層は赤褐色(5YR4/6)の焼土で、カマド燃焼部の天井・側壁が崩壊したものと推定される。d層は燃焼部焚き口に堆積している木炭層で、燃料残滓と推定される。



SX1583 屋外カマド堆積土

層位	特徴
1層	焼土ブロック(壁の崩落土)
2層	暗褐色(5YR3/4)炭を多量に含む(燃料残滓か)

SI1582 積穴住居跡堆積土

層位	特徴
1層	にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂質シルト 脳灰岩粒少量含む
2a層	にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂質シルト 脳灰岩粒多量含む
2b層	褐色(10YR4/4)シルト 脳灰岩粒多量含む
3a層	褐色(10YR4/5)シルト 脳灰岩粒少量含む
3b層	にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト 脳灰岩粒含む
4a層	暗赤褐色(5YR3/4)シルト 黒焦げの後土煙道天井崩土
4b層	明黄褐色(10YR6/6)細砂質シルト 煙道堆積土
4c層	赤褐色(5YR4/6)シルト 焼土 燃焼部崩土
4d層	木炭層 燃料残滓

※第4・5層については第5図参照。第5a・b層は第5a層と第5b層の混合層。

第10図 SI1582 積穴住居跡・SX1583 屋外カマド跡

出土遺物には土器と瓦がある（第11図）。1層からは土師器甕胴部（ロクロ調整）1点、丸瓦筒部1点が出土している。2層からは土師器甕口縁部（ロクロ調整）1点、同甕胴部（非ロクロ調整）1点、須恵器甕口縁～胴下部（1）1点、同甕口縁～肩部（2）1点、丸瓦端部2点が出土している。第11図1の須恵器甕は鉢状のもので、頸～胴下部外面に平行叩き目がみられる。3層からは平瓦IA類（第I期）の小破片1点が出土し、築地北側第5層出土の大破片と接合した（5）。カマド内の4層からは、土師器甕口縁部（ロクロ調整（3））と同一個体と思われるもの数片と、同甕胴部（非ロクロ調整）1点、須恵器甕胴部3点、平瓦IB類（第II期（4））1点、丸瓦側縁1点、筒部1点が出土している。

SX1583 屋外カマド跡（第10図）

遺構：SI1582 壓穴住居跡東側において、第I層下の第3b層上面で検出した。この屋外カマドは焚き口・底面・側壁・奥壁からなる。天井については、上部が削平を受けているため不明である。残存規模は幅54cm、奥行き74cm、奥壁の高さ20cm、側壁の高さ約15cmである。底面は浅皿状に丸味をもち、奥壁・側壁は内湾気味に立ち上がる。奥壁・側壁とも赤褐色に焼けている。底面中央の奥壁寄りの部分には支脚（自然石）が立てられている。

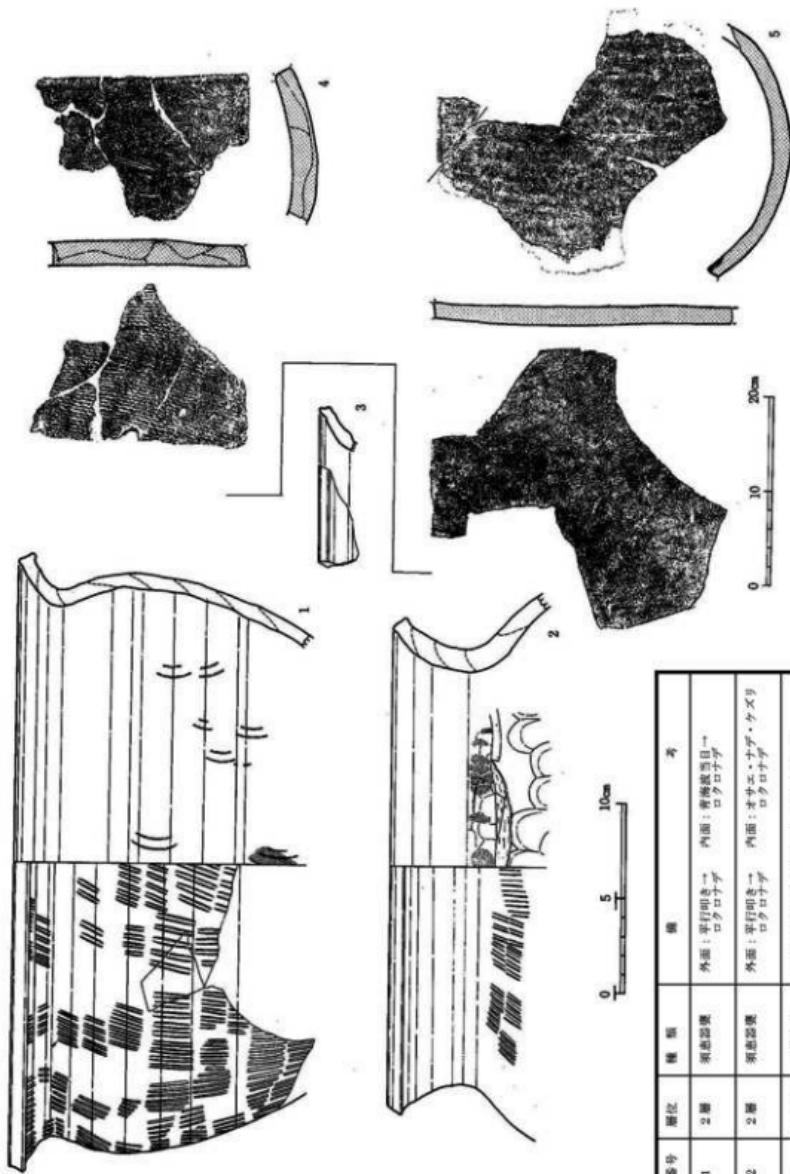
堆積土と出土遺物：支脚の周囲から底面にかけて、炭を多量に含む暗褐色（7.5YR3/3）シルトが厚く堆積している。その上と壁ぎわには焼土ブロックが堆積している。前者は燃料残滓、後者は壁などの崩壊土と考えられる。遺物には土師器甕・須恵器甕・平瓦がある（第12図）。その出土状況は、焼土ブロック層の上部において、平瓦凸面上に土師器甕が潰れた状態で一部重なっていた（第10図）。土師器甕（第12図1）は製作にロクロを使用した長胴のもので、全体に火熱を受けており、胴部は特に著しい。須恵器甕（2）は口縁部が「く」字状に外反し、口唇部が肥厚するもので、肩は緩やかで張りをもたない。この須恵器はカマドから出土したが、特に火熱を受けた痕跡はみあたらない。平瓦（3）はII B類（第II期）で、全体に火熱を受け表面が荒れている。

土 壤（第13・14図）

SK1584 土壤：築地南側の調査区東端において、第3b層再堆積層下の第5a層上面で検出した。SK1586 土壤と重複し、それよりも新しい。本土壤は調査区のさらに東側に延びているが、平面形は不整楕円形と推定される。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。検出部分の規模は、東西軸2.6m、南北軸2.7mで、深さは約15cmである。

堆積土は3層に分かれ。1層は暗褐色（10YR3/4）シルトで、上面に細かい木炭層がある。2層は暗褐色（10YR3/3）シルト、3層は、褐色（10YR4/4）シルトで灰色味がある。遺物としては土器と瓦がある。土器は土師器杯口縁部（非ロクロ）1点、須恵器胴瓶胴部1点である。瓦は平瓦II B類（第II期～III期2点、第III期2点、第14図1）、紐作りの平瓦（第14図2）

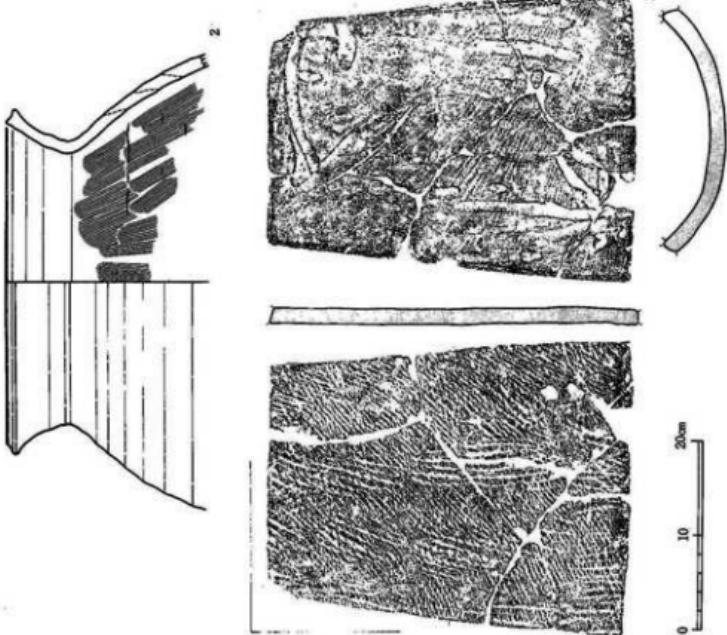
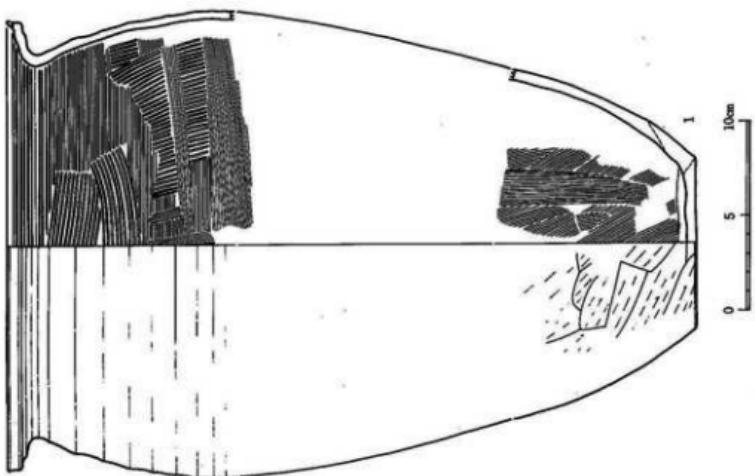
第 11 図 SI1582 堅穴住居跡出土遺物



番号	部位	種類	備考
1	2面	羽齒器頭	外面：平行明き “ロクロナデ” 内面：齊海波当目 “ロクロナデ”
2	2面	羽齒器頭	外面：平行明き “ロクロナデ” 内面：“サエ・ナデ・ケズリ” 内面：“サエ・ナデ・ロクロナデ”
3	4-5面	土師器頭	ロクロ地用 背大輪板 同一全体破片数点
4	4-5面	平瓦Ⅱ目層	内面：繩目 背面：斜面 前面：ナラ 側面：小口面：ケズリ
5	3面	平瓦ⅠA層	内面：スジ消し 背面：布目一ヌリ消し

第12図 SX1583 屋外力マド跡出土遺物

番号	部位	種類	備考
1	内面	土削芯裏	外面：ログラナデ・ケヌリ 内面：解毛目・ロ
2	内面	剥離芯裏	外面：ログラナデ 内面：ナダ・ログラナデ
3	上面	平瓦直型	片面：ホトリ直・布目・ナゲ



1点、その他時期不明の平瓦1点、丸瓦（端部1点、側縁4点）である。

SK1585 土壌：築地南側の調査区東端部において、第8層上面で検出したが、第5層との関係は明確にできなかった。また、SK1588 土壌と重複しているが、その新旧関係についても把握できなかった。平面形は不整の隅丸方形である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は東西軸 1.9m、南北軸 1.85m、深さ約 25cm である。

堆積土は褐色（10YR4/4）シルトで、遺物は出土していない。

SK1586 土壌：築地南側の調査区東南隅において、第1層下の岩盤上面で検出した。SK1584 土壌と重複し、それより古い。本土壌は調査区外の南・東側に延びており、全体の形状は把握できなかった。また、深さ 30cm 程掘り下げて、灰白色火山灰層の広がりを検出したが、完掘していない。このため、底面・壁面の形状は不明確である。検出した規模は東西 3.0m、南北 2.4m である。なお、灰白色火山灰層下には褐色（10YR4/4）シルトが堆積していた。遺物は出土していない。

SK1587 土壌：築地南側の調査区東端において、築地断ち割り断面（D-D'）で、第3b層下の第5a層上面で確認した。したがって、平面形は不明である。しかし、断面でみると、底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。その規模は南北 1.25m、深さ約 40cm である。堆積土は暗褐色（10YR3/4）シルトで、南側が凝灰岩礫を斑状に含む。また、全体的に下部程暗く、上部が明るい。遺物は出土していない。

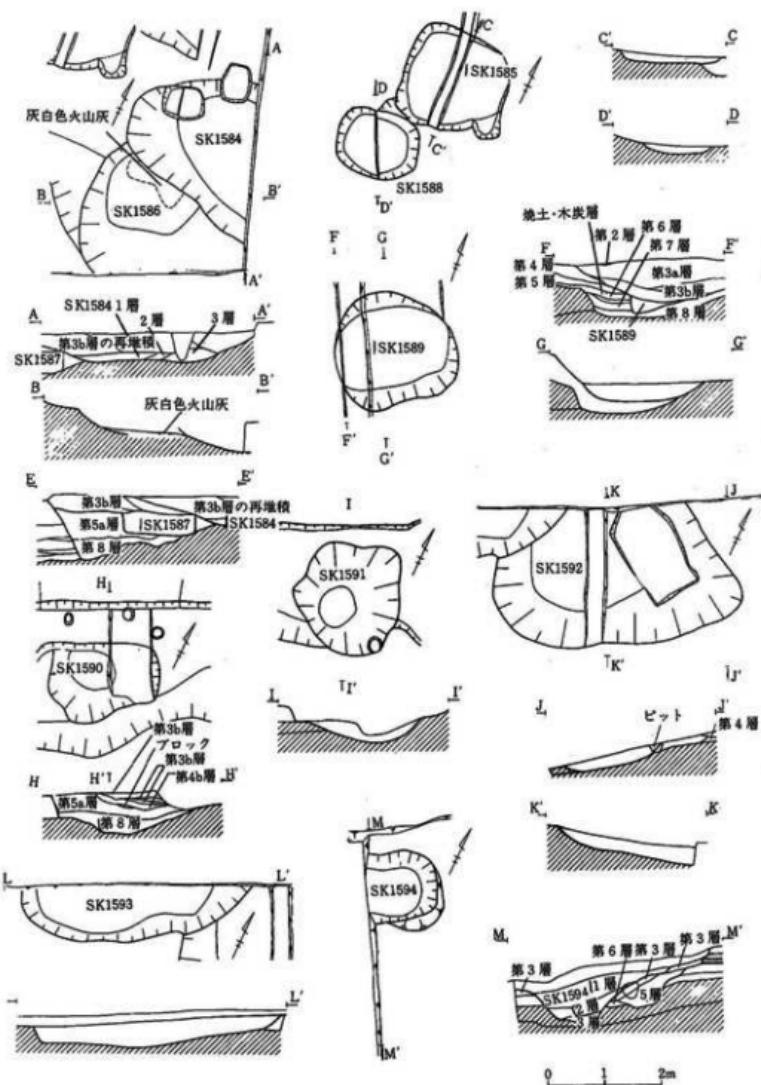
SK1588 土壌：築地南側の調査区東側において、第1層下の岩盤上面で確認した。SK1585 土壌と重複しているが、新旧関係は把握できなかった。平面形は梢円形で、規模は東西軸 1.5m、南北軸 1.1m、深さ約 20cm である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。なお、SK1588 土壌は東側半分を完掘したが、西側は 10cm 程度でとめてある。

堆積土はにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトで、上部に厚さ 2～3cm の炭化物層がのっている。遺物は出土していない。

SK1589 土壌：築地南側の調査区西端付近において、第3b層下の第6層上面で検出した。土壌西端部は築地断ち割りの際壊してしまったが、平面形はやや歪んだ梢円形と推定される。残存規模は東西 2.0m、南北 2.1m、深さ約 30cm である。土壌西端部の推定部分をいれると、東西 2.2m となる。底面は皿状で丸味をもち、壁は斜め上方に立ち上がる。

堆積土はにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトである。遺物は出土していない。

SK1590 土壌：築地南側の調査区中央部において、第8層下の岩盤上面で検出した。本土壌は SD1580 溝の東端部分と重複している。両者とも第8層に覆われているため、新旧関係を直接把握できないが、SD1580 溝は築地構築に関連するものであること、SK1590 土壌は削平整形の行われた築地基礎を掘り込んでいることから、本土壌は SD1580 溝より



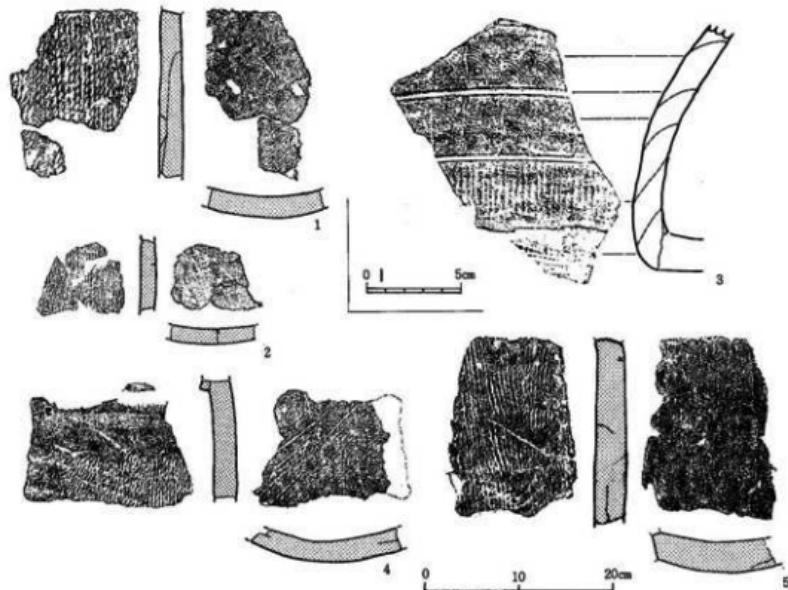
第13図 土 壤

新しいと推定される。本土壙の平面形は歪んだ楕円形で、底面は凹凸のある丸底状をしている。壁は斜めに立ち上がる。規模は東西 2.0m、南北 1.4m、深さ約 30cm である。本土壙は前述のように第 8 層に覆われるが、上部で窪んでおり、第 5 a 層が堆積している。

遺物は出土していない。

SK1591 土壙：築地南側 SK1590 土壙に隣接した東側において、第 8 層下の岩盤上面で検出した。本土壙も第 8 層に覆われ、その上部が窪んで第 5 a 層が堆積している。平面形は歪んだ円形で、底面はやや凹凸のある丸底状をしており、壁は斜めに立ち上がる。規模は東西 1.9m、南北 2.0m、深さ約 60cm である。本土壙も削平整形の行われた築地基礎を掘り込んでおり、SK1590 土壙と一連のものと考えられる。遺物は出土していない。

SK1592 土壙：築地北側の調査区中央部において、第 1 層下の第 3 層上面で検出した。SK1593 土壙と重複し、それより古い。また、本土壙は調査区のさらに北側に延びている。検出部分から、平面形は隅丸三角形と推定される。規模は東西 4.4m、南北 2.5m 以上、深さ約 30cm である。底面は平坦であるが、北側に低く傾斜している。壁は緩やかに立ち上



番号	遺構	種類	備考	3	4	5
1	SK1594	平瓦 II B 型	凸面：圓叩き 回面：ナデ	SK1592	項点部便	外面：平行叩き→クロナダ→沈線・波状文
2	SK1594	平瓦 II C 型	組合せ 凸面：圓叩き 回面：布目	SK1592	軒平瓦	凸面：圓叩き 回面：素切リ瓶・布目・一部ナデ

第 14 図 土壙出土遺物

がる。なお、本土壌の東側部分は、壁が垂直に立つ長方形の土壌状をしているが、岩盤の筋理によるものと思われる。

堆積土は褐色(10YR4/4)シルトで、下部は凝灰岩礫を含んでいる。出土遺物には土器と瓦がある。土器は須恵器壺頭部1点、(第14図3)1点である。瓦は軒平瓦の平瓦部II B類(第III期(4))1点、平瓦II B類(第II~III期1点(5))である。

SK1593 土壌：築地北側において SK1592 土壌西側と重複して、第Ⅰ層下の地山面で検出した。SK1592 土壌よりも新しい。本土壌も調査区のさらに北側に延びており、検出部分の平面形は半円状をしている。検出した規模は東西 4.1m、南北 1.0m、深さ約 45cm である。

堆積土は次の4層に分かれる。1層：褐色（10YR4/6）シルト。2層：褐色（10YR4/4）シルトで砂粒を含む。3層：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルトで凝灰岩礫を含む。4層：褐色（10YR4/4）シルト。遺物は出土していない。

表 1 第 49 次調查出土土器破片資料

種類 時期 層位 遺構	(斜平瓦を含む)							丸 瓦				合計	
	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	不明	計	三輪部	端部	側縁	開部	計		
築地南側	第1層	1	8	11	15	11	2	48	6	4	2	15	63
	第3層	1	9	3	16	4		33	5	7	3	6	21
	第4層		1				1						1
築地北側	第1層			1	5	4		10	1	2	2	3	21
	第2層		1					1	1		1	2	3
	第5層		1	1	1			3		1		1	4
SI 1582 住居跡	1層										1	1	1
	2層											2	2
	3層	1					1						1
	4層		1				1			1	1	2	3
SK1583 カマド跡		1					1						1
SK1584 土壙			2	2		2	6		1	4		5	11
SK1582 土壙			1	1			2						2
地区・層不明	1	1	2	5		1	10	5	4	3	2	14	24
計	4	24	22	49	22	6	127	25	21	18	16	80	297

表2 第49次調査出土瓦一覧

4. 考 察

今回の調査で検出した遺構には築地跡1、溝跡2、竪穴住居跡1、屋外カマド跡1、土壙11がある。築地両側には、南側に第2~8層、北側に第2~6層の堆積がみられた。このうち築地南側の堆積土は比較的保存が良く、築地崩壊過程において構築された竪穴住居跡や屋外カマド跡などが検出され、遺物も出土している。これに対して、築地北側の堆積土は保存があまり良くなく、南側堆積土との対比も困難である。

ここでは、築地およびその崩壊過程で構築された遺構の年代と変遷について、可能な範囲で検討し、丸山地区における外郭北辺区画施設の特徴について述べることにする。

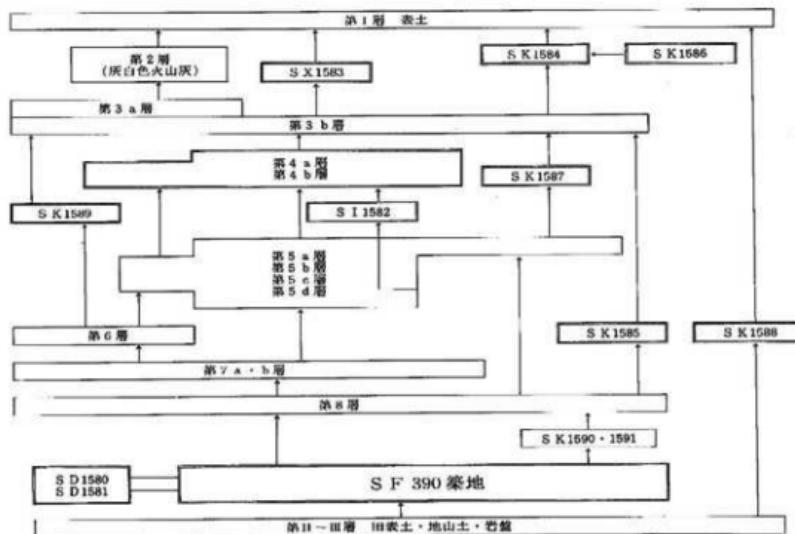
(1) 遺構の年代と変遷

層の特徴や出土遺物から年代推定が可能なものとしては、第2層・SI1582住居跡・SX1583屋外カマド跡・SK1586土壙がある。これらを年代の新しい上層のものから検討し、その成果と層位的関係に基づいて、その他の層や遺構の年代についても検討を加えてみることにする(第15図)。

第2層は灰白色火山灰層で、第3a層上面の埋んだ所に部分的に残っていたものであるが、本来は第3層全体を覆っていたと推定され、SK1586土壙からも検出されている。この灰白色火山灰は10世紀前半頃のものと考えられる⁽¹⁾。

SX1583 屋外カマド跡からは、土師器甕・須恵器甕・平瓦 II B 類（第 II 期）が出土している（第 12 図）。土師器甕は製作にロクロを使用したもので、平安時代に一般的なものである。また、須恵器甕は口縁部が「く」字状に外反し、口唇部が肥厚するもので、肩は緩やかで張りをもたない。このような器形の甕は多賀城跡大畑地区 SI361 住居⁽²⁾跡や、古川市藤屋敷遺跡第 12 号住居⁽³⁾跡で出土している。SI361 住居跡出土土器は、「多賀城跡出土土器の変遷」における D 群土器として位置づけられ、9 世紀後半頃のものと考えられている。藤屋敷遺跡でも伴出する須恵器坏はすべて底部の切り離しが回転糸切りで、同じ頃のものと考えられる。したがって、SX1583 屋外カマドは 9 世紀後半頃のものと推定される。

SX1582 住居跡からは、土師器甕・須恵器甕・平瓦 I A 類（第 I 期）・平瓦 II B 類（第 II 期）が出土している（第 11 図）。土師器甕は製作にロクロを使用したもので、このような甕は既に述べたように平安時代に一般的なものではあるが、伊治城跡 SI04・13 住居跡などからも出土し、8 世紀末にさかのぼる場合もある。さらに、外面に平行叩き目のみられる



第 15 図 第 49 次調査発見遺構の重複関係

鉢状の甕は伊治城跡 SI04・13 住居跡で出土している。このような特徴をもつ須恵器甕は国分寺下層式から表杉ノ入式土器の初期のものに伴うもので、多賀城跡政府地区の SK364 土壌（C群土器）からも出土しており、C群土器は 8世紀前半頃のものと考えられている。⁽⁶⁾したがって、これらのことから SI1582 住居跡は大まかに 8世紀末から 9世紀前半頃のものと推定される。

以上のように、今回検出された層・遺構のなかで、第2層は 10世紀前半頃、SX1583 屋外カマド跡は 9世紀後半頃、SI1582 住居跡は 8世紀末から 9世紀前半頃と推定された。したがって、第2層（灰白色火山灰）の堆積していた SK1586 土壌より新しい SK1584 土壌は、10世紀前半以降のもの、また第2層（灰白色火山灰）に覆われる第3a層以下は 10世紀前半以前のものと考えられる。さらに、SX1583 屋外カマドが第3b層堆積後に構築されていることから、第3b層以下は 9世紀後半以前となる。また、SI1582 住居が第5c層堆積後に構築されていることから、第5c層以下の層・遺構は 9世紀前半以前とすることができます。SF390 築地跡は、本体およびその基礎から遺物が出土していないが、SI1582 住居跡より古いことから、9世紀前半以前であることがわかる。

以上のことがらに基づいて、遺構の変遷を整理すると、次のようなになる。

1. 築地構築から初期の築地崩壊まで：多賀城創建期の 8世紀前半以降で 9世紀前半以前に築地が構築される。その後、築地に近接して SK1590・1591 土壌などが掘られ、それらは築地の初期崩壊土である第8層によってほぼ覆われる。

2. 築地崩壊が顕著になり、SI1582 住居が構築・廃絶されるまで：8世紀末から 9世紀前半頃には、築地の崩壊に伴い第7～5c層が堆積し、築地下部は崩壊土によって覆われてしまう。第5c層堆積後に SI1582 住居が構築される。SI1582 住居の壁が犬走り部分まで掘り込んでいることから、基壇状の築地基礎はその形状を失うまで崩壊土に覆われてしまったとみられる。

3. 築地崩壊の進展と SX1583 屋外カマドの構築・廃絶まで：9世紀後半までのあいだに築地の崩壊はさらに進み、第3層堆積後に SX1583 屋外カマドが構築される。この時点で、築地の高まりは現状に近い状態にまで至る。その間に、SK1587 土壌が掘られる。また、この時期までには SK1585・1589 などの土壌が掘られる。

4. 第2層（灰白色火山灰）堆積前後：10世紀前半に降灰した灰白色火山灰の多くは流失し、部分的な窪地や土壌にのみ残る。また、その前後には SK1584・1586 土壌などが掘られる。

以上のように丸山地区では外郭北辺区画施設として築地が構築されるが、その後築地として維持するための修復が行われないままに崩壊が進み、その過程において堅穴住居や屋

外カマドが作られ、土壤が掘り込まれたりしたものと考えられる。

(2) 外郭北辺区画施設の特徴について

今回調査を行った丸山地区の外郭北辺は位置・地形などの点で、北門の推定地として最も有望視されていた所であった。調査の結果、門遺構こそ発見されなかったものの、外郭北辺の区画施設が築地であったことが判明した。また、調査の過程において、第4層を築地崩壊後の土壠とを考えたが、その後の検討により土壠とはみなし難いという結論に至った。⁽⁷⁾ここでは、外郭北辺の区画施設として構築された SF390 築地の特徴を整理しておきたい。

1. 築地は丘陵尾根を境にして、挾角 167° で屈曲している。
2. 築地両側には排水などの役割を果たしたと推定される溝があり、その部分では築地基礎が基壇状に削りだされ、犬走りが形成されている。その他の部分の築地基礎は削平整形もしくは盛土整地によっている。
3. 築地の規模を本体基底幅でみると 1.85m 前後で、積み手の違いはほぼ 3 m を単位としていることが認められた。
4. 築地本体は凝灰岩礫を多量に含むシルトを互層に積んだ版築によって構築されている。
5. 築地の構造は寄柱をもたないもので、瓦葺きではなかったものと考えられる。すなわち、築地構築時に仮枠板を押さえたと推定される柱穴は検出されたが、寄柱穴については検出に努めたものの、確認されなかった。また、瓦は破片を含めて総数 207 点が出土したが、これらを丸瓦の玉縁部と端部に限定してみると、それぞれ 25 点・21 点に過ぎない。さらに、出土状況に規則性がみられず、屋根からの崩壊を示す形跡は認められなかった。
6. 築地の構築は多賀城創建期の 8 世紀前半以降で、8 世紀末から 9 世紀前半には築地本体下部が崩壊土によって覆われてしまう。
7. 築地は構築後に、その維持のための補修・修復が行われないままに崩壊したものとみられる。

上述の特徴のうち 1 ~ 5 は築地の構造・規模・築成土・構築方法など、6・7 は構築時期とその維持・管理にかかわるものである。これらの点についてこれまで調査が比較的進んでいる南辺築地⁽⁸⁾と較べると次のようになる。南辺築地は寄柱をもつ構造であるのに対し、北辺築地は寄柱をもたない。また、南辺築地は基底幅が 2.2~3.1m であるのに対し、北辺築地は 1.85m 前後と規模が小さい。南辺築地は凝灰岩礫を含むものもあるが、北辺築地ほど多量ではない。さらに、重要なことは、南辺築地では何時期かの修復痕跡が

みられ、築地として長期にわたる維持・管理がなされているのに対し、北辺築地は構築後修復されないままに崩壊している。このような相違がどのような要因に基づくのかの検討は今後の課題である。

- 註 1 a 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要VII』1980 P. 31~33
- b 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡本文編』P. 80~82・401
「承平4年以前でしかもこれに近い頃のもの」と考えている。
- 2 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－昭和46年度概報－』宮城県多賀城跡調査研究所年報1971 1972 P. 35~37
- 3 加藤道男・佐藤好一「藤屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第63集 1980 P. 153~157
- 4 註 1 a と同じ
- 5 a 宮城県多賀城跡調査研究所『伊治城跡 I』多賀城跡関連遺跡調査報告書第3冊 1978
宮城県多賀城跡調査研究所『伊治城跡 II』多賀城跡関連遺跡調査報告書第4冊 1979
- b 註 1 b の P. 1~38
- 6 註 1 b の P. 263~264 P. 389~392
- 7 調査の過程で土壘と推定した第4層は、層厚30cm以下で焼灰岩礫を多量に含む黄褐色シルトである。第4層上に堆積している第3 b 層も、層厚30cm以下の褐色シルトで、その上面にSX1583屋外カマドが構築されている。したがって、SX1583屋外カマドが構築された段階では、第3 b 層を仮に土壘集成土に含めて考えたとしても、その高まりはなだらかで、土壘とはみなしづらいという結論に至った。
- 8 宮城県多賀城跡調査研究所年報1970(第7次調査)、年報1973(第20次調査)、年報1974(第24次調査)、年報1978(第34次調査)などによる。

III 第50次調査

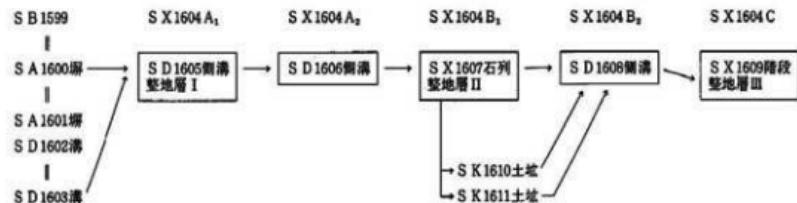
多賀城跡第50次調査は多賀城市市川字城前45、46、47、49、51-1・2、53番地のうち約900m²を対象として昭和61年5月6日から10月17日まで実施した。この調査結果については現在整理中であり、詳細は次年度の当研究所年報で報告することとし、ここでは調査の目的と成果の概要を簡単に記すこととした。

〔調査の目的〕

本地区は政庁南門跡の南にあたり、今回の調査は昭和58年度に実施した第43・44次調査に引き続き政庁南門から外郭南門に通ずる道路跡の解明を目的としたものである。

〔調査成果の概要〕

政庁中軸線の西側に設定した調査区北半部で、道路遺構（側溝3・盛土整地層3・路肩の石列1・階段1）のほか材木塀1や門1などを検出したが、南半部では12世紀および近世の平場形成により古代の遺構は完全に削平されていた。北半部の遺構の重複関係は下図の通りであり、道路遺構と道路以前の遺構に分けてとらえられる。



第16図 調査区北半部の遺構の重複関係

(1) SX1604 道路跡

SX1604道路跡はその構築に伴う整地層を基準としてABCの3時期に大別され、さらに重複関係からAはA₁・A₂に、BはB₁・B₂に細分される。なお、この東側の地区を対象とした昭和44年度の第5次調査の結果、道路跡の東半部が完全に削平されていることが確認されているため、各道路の幅については政庁の中軸線を基準に東西対称として推定した。

SX1604 A₁：地形の低い西半部に盛り土（整地層I）して路面を造成したもので、素掘りのSD1605側溝を伴う。路幅は約12mと推定される。

SX1604 A₂：A₁のSD1605側溝が埋まつた後、側溝を改修した時期のものである。こ

の時期の SD1606 側溝は SD1605 よりやや東に寄った位置にあり、路幅は約 10m と推定される。

SX1604 B₁ : A₂ 道路の上に盛り土（整地層 II）して路面を造成し、政府に近い部分では路肩に石を並べている（SX1607 石列）。路幅は約 12m と推定される。

SX1604 B₂ : B₁ の道路の西側に若干の自然堆積層が形成された後、SX1607 石列の西に接して SD1608 側溝を設けたものである。

SX1604 C : B₂ 道路の上にさらに盛り土（整地層 III）し、円礫を用いて階段（SX1609）を造ったものである。階段は 4 段分のみ遺存し、北 2 段分は石の抜穴で確認できる部分が多い。踏み面は 1.4~1.8m、蹴上げ 0.2m 弱である。階段の西端が遺存しているため、階段幅すなわち路幅は約 23m と推定できる。なお、整地層 III はこれ以前の整地層と異なり、道路部分だけではなく政府西南のかなり広い地域に及んでいる。

道路の年代：最も古い SX1604 A₁ は今回の出土遺物および第 44 次調査で検出した最も古い道路跡の年代観との関係からおよそ 8 世紀前半頃とみられ、最も新しい SX1604 C は、整地層 III の出土瓦から構築年代が 9 世紀初頭頃で、SX1609 階段を覆う堆積層の土器から廃絶が 10 世紀中頃と考えられる。

（2）道路以前の遺構

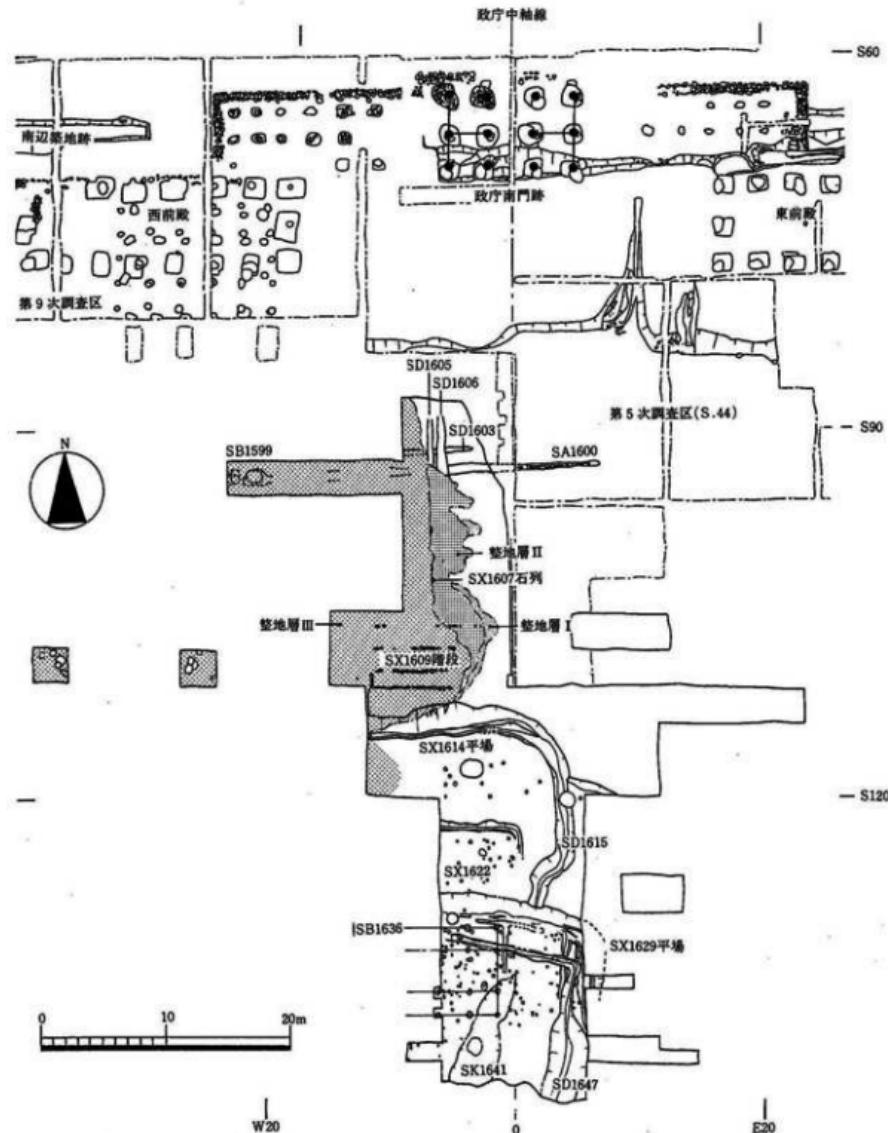
道路以前の遺構には、政府南門から約 25m、政府中軸線の西約 22m の位置で発見された SB1599 門跡とその東西に延びる SA1600・1601 堀跡、堀の北に並行する SD1602・1603 溝がある。これらは、SB1599 門と SA1600・1601 堀の抜き取りが一連であることや配置関係からみて同時期の施設と考えられる。

SB1599 門跡：1 間の掘立式門跡で、柱間は約 1.5m とみられる。柱穴は一辺 0.7~1.0 m で、とともに柱抜取穴がみられる。

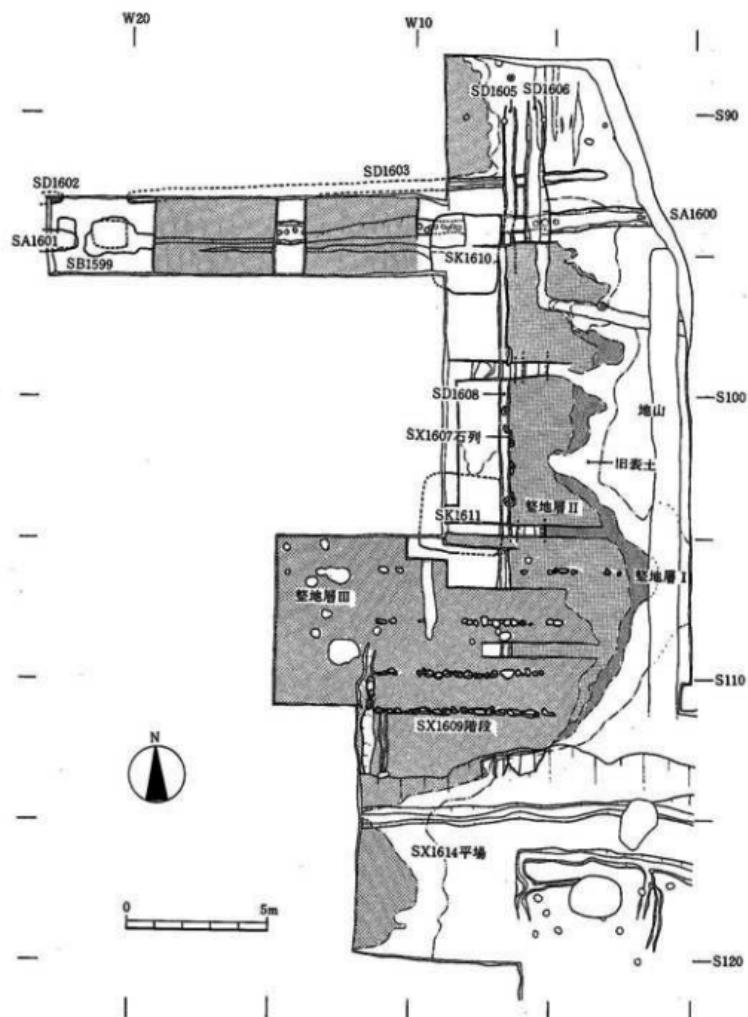
SA1600・1601 堀跡：幅 50 cm 前後の布掘りの中に直径 15 cm 程の材木を立て並べた堀の跡である。西への延びは不明であるが、東は第 5 次調査で検出した布掘りに連なり、28m 以上であったことが知られる。

SD1602・1603 溝：それぞれ SA1601・1600 跡の北側に約 1.5m の間隔をおいて平行する細い溝である。

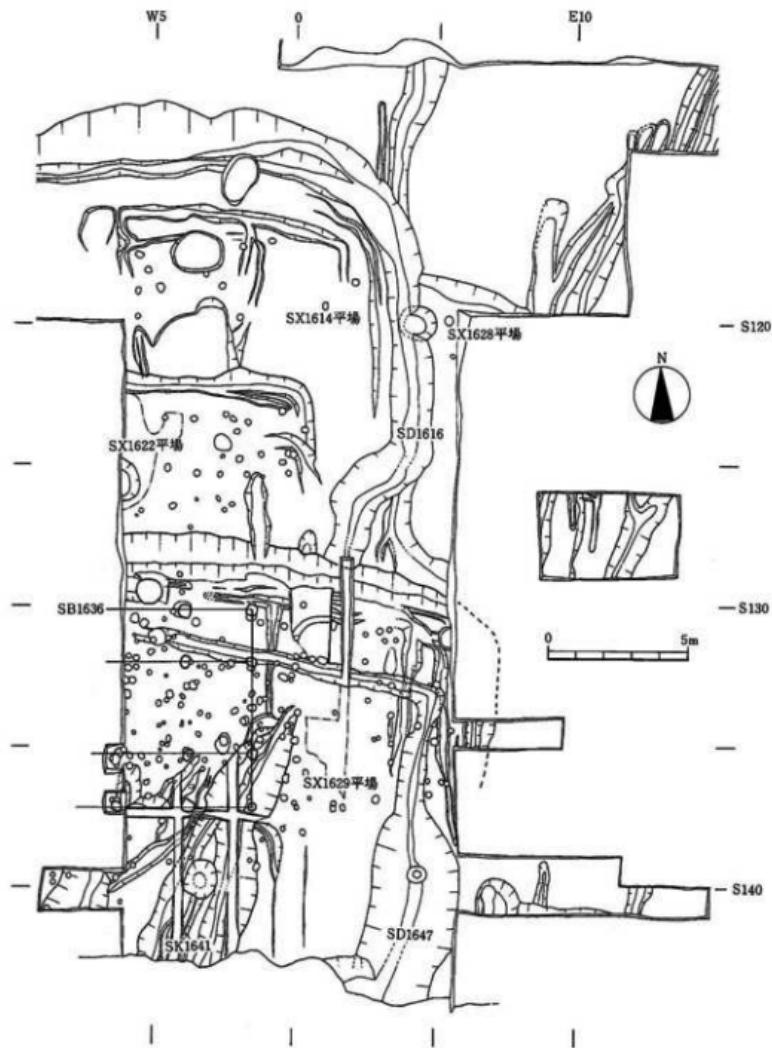
これらは 8 世紀前半と考えられる SX1604 A₁ 道路跡より古く、地形的にみて北側にあった施設を区画したものと推定される。その性格については、簡易な構造であることや、これまでの政府跡の調査で 8 世紀前半の第 I 期より古い遺構が全くみられないことなどから、ここでは政府第 I 期造営時の仮遮蔽施設とみておきたい。



第17図 第50次調査区全体図



第18図 調査区北半部の検出遺構



第19図 調査区南半部の検出遺構

IV 第 51 次調査

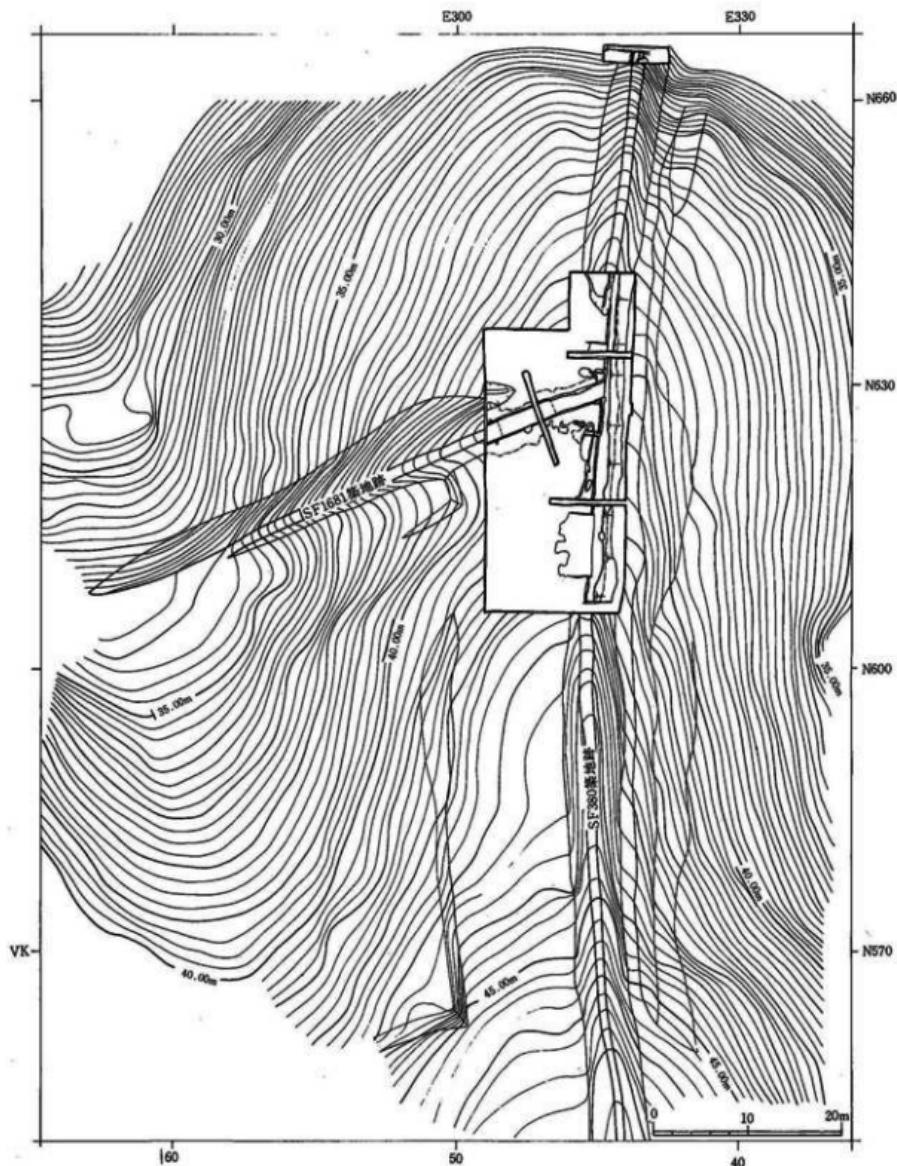
1. 調査経過

第 51 次調査は多賀城市大字市川字大久保 37-1 のうち、約 500 m² を対象として実施した。調査対象地区は外郭東辺のさらに東側に位置し、南北に延びる築地状高まりと外郭北東隅から外郭北辺の東延長線上に延びる築地状高まりが接続する部分である。

南北に延びる築地状高まりについては、橋形地区を対象とした第 17 次調査によって、築地であることが確認されていた (SF380 築地)。しかし、この SF380 築地は急斜面を経て加瀬沼の水際まで延びていることから、全体が築地なのか否か問題となっていた。また、北東隅から東に延びて SF380 築地に接続する東西方向の築地状高まりについては未調査のためその構造は不明確なままであった。さらに、このような区画施設がこれまで多賀城の外郭線と考えられてきた北辺や東辺築地よりも外側に位置することから、どのような一郭を区画するものなのかという点についても推測の域を出ていなかった。これらの問題点を踏まえて、第 51 次調査は両区画施設の構造・変遷・区画対象を解明する最初の調査として、昭和 61 年 9 月 6 日から 12 月 5 日まで実施した。

調査は対象地区が雑木林であったことから、まず立木の伐採作業から始まった (9 月 6 日)。伐採作業と併行して、東門地区の基準点から原点を移動し、調査区の設定を行うとともに、遺構と地形の関係を把握するため、調査区周辺の約 8,000 m² を対象として縮尺 1/200 の地形測量図を作成した (10 月 6 ~ 11 日)。その結果、SF380 築地は北へ延びる丘陵尾根の東縁部に位置していることが明確になった (第 20 図)。

発掘調査は、SF380 築地およびそれに接続する東西方向の築地状高まりに、合計 4 本の土層観察用あぜを設定し、表土を排除することから始めた。また表土排除と併行して、崩壊土の堆積状況を把握して調査の見通しを得るために、土層観察用あぜに沿って幅 1 m のトレンチを設定した。その結果、SF380 築地本体が検出され、その西側には第 1 ~ 6 層の堆積があること、東側は削平が本体まで及んでいることなどがわかった。また、東西方向の築地状高まりについても、これが築地であること (SF1681 築地)、その両側に SF380 築地西側の第 1・2・6 層に対応する層が堆積していることが判明した。この段階で、両築地接続部の南側に設定したトレンチでは第 5 層上面が平坦なことから第 5 層崩壊後の基壇 (整地面) の可能性を考えた。ところが、この第 5 層は他のトレンチではすべて崩壊土の様相であったことから、第 5 層を崩壊土とのみ考えるに至った (11 月 5 日)。しかし、この判断は誤りで、第 5 層上面が整地されていることがその後の調査で明らかになった。



第 20 図 発掘調査区および周辺の地形

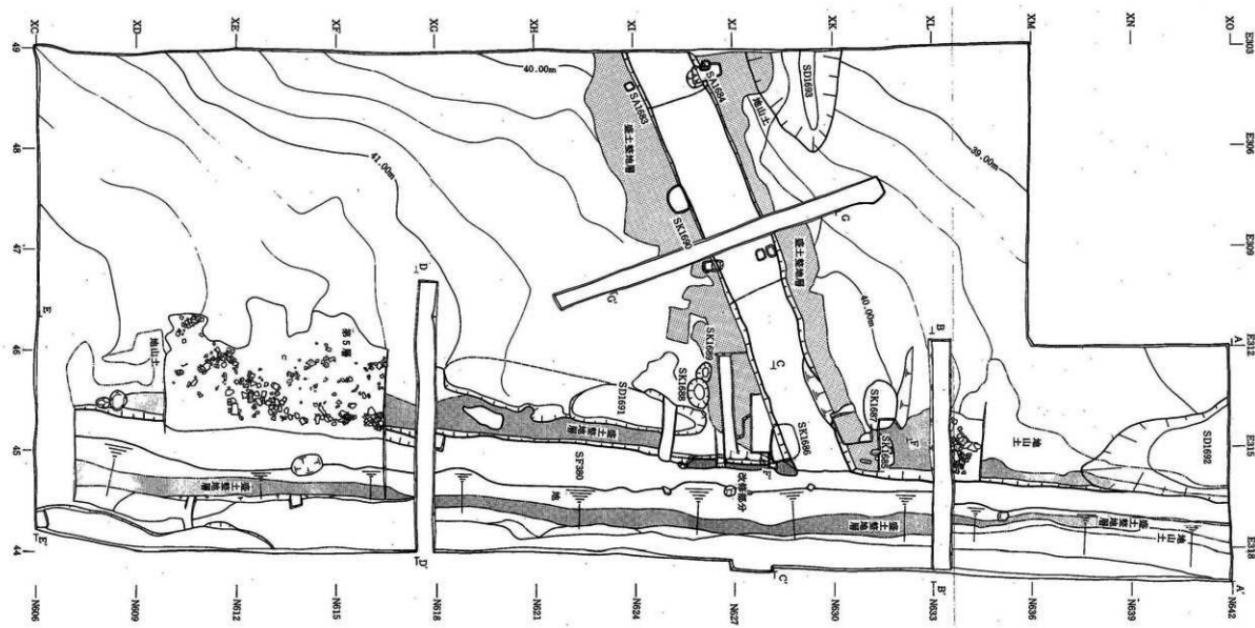
表土の排除に統いて、第2層以下の発掘に移り、第5層において SF380 築地本体の屋根から崩壊したとみられる状態で多量の瓦が出土した。そこで、瓦の出土状況を記録するために、写真撮影と縮尺 1/20 の平面図作成を行った（11月 6～18日）。第5層における崩壊瓦出土状況図作成後、出土瓦の一部は今後の検証のためそのままの状態で保存することにし、調査の主体は第5層以下における両築地の新旧関係の検討と本体・基礎の検出に移った。また、SF380 築地は急斜面を経て加瀬沼の水際に続くことから、急斜面部分における状況を調べるため、調査区北側約 20m の所に幅 2 m・長さ 7 m の北トレーンチを設定することにした。

その結果、SF1681 築地は SF380 築地より新しいこと、両築地とも削平整形と盛土整地による基礎の上に直接本体が構築されていることなどが明らかになった。さらに、両築地接続部南側では SF380 築地の崩壊土である第5層が一部本体の下に入り込む状況から SF380 築地に改修があったことが確認され、その部分では第5層上面が改修された SF 380B 築地の基礎となっていることが判明した。SF1681 築地については、約 6 m 単位の積み手の違いを確認するとともに、瓦の出土量が少ないことから瓦葺きとは考えにくいこともわかった。この段階で築地の調査に一区切りがついたので、写真撮影と縮尺 1/20 の平面図を作成することにした。

一方、北側急斜面に設定した北トレーンチでも SF380 築地が検出され、多量の瓦が出土したことから、やはり瓦葺きの築地であることが推測された（11月 27日）。

平面図作成後、両築地の構築状況などをさらに詳しく調べるために、築地の断ち割り調査を 4箇所で実施した。その結果、両築地とも基礎の上に凝灰岩礫を多量に含む土で本体を構築していること、本体の基底幅については SF380 築地が 2.23m、SF1681 築地が 1.94m まで残存していることが確認された。また、両築地接続部における SF1681 築地の断ち割り調査によって、SF380 築地の小規模な崩壊（第6B 層）の後、その崩壊土上に整地（第6A 層）を行い、SF1681 築地を SF380 築地に接続させて構築しているという過程が判明した。さらに、SF1681 築地の断ち割り調査では本体ぎわと本体下から柱穴状のピットが検出された。寄柱の存在を想定して柱穴の検出に努め、数個の柱穴状ピットを確認したが、その配置に規則性が認められないことから寄柱穴と断定するには至らなかった。以上の成果について補足図面を作成し、12月 5日に調査を終了した。

なお、調査の最終段階の踏査によって、SF380 築地の南側は東門の東で途切れ、さらに南へ続くことを確認した。



第21図 造構配置図

2. 層序

SF380 築地西側と SF1681 築地両側には築地に関連する層（構築・崩壊土）が厚く堆積している。また、SF380 築地東側には削平後の堆積層がみられる。

SF380 築地西側・SF1681 築地両側の堆積層

両築地の堆積層はその接続部付近で保存が良く、両者の対応関係も把握できる。この部分を模式的に示したのが第 22 図である。ここでは第 22 図と各地区的断面図（第 23・26・27 図）を用いて、基本的な層の状況を述べることにする。

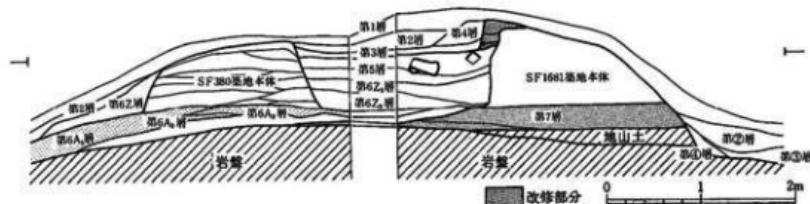
第 1 層：現在の表土。褐色（10YR4/4）シルト層で軟らかい。厚さは 10~30cm で、全体を覆う。

第 2 層：暗褐色（10YR3/4）シルト層。厚さ 10~20cm の部分が多い。両築地接続部の南側ではとくに保存が良く、最も厚い部分（G-G'）では 40cm となる。

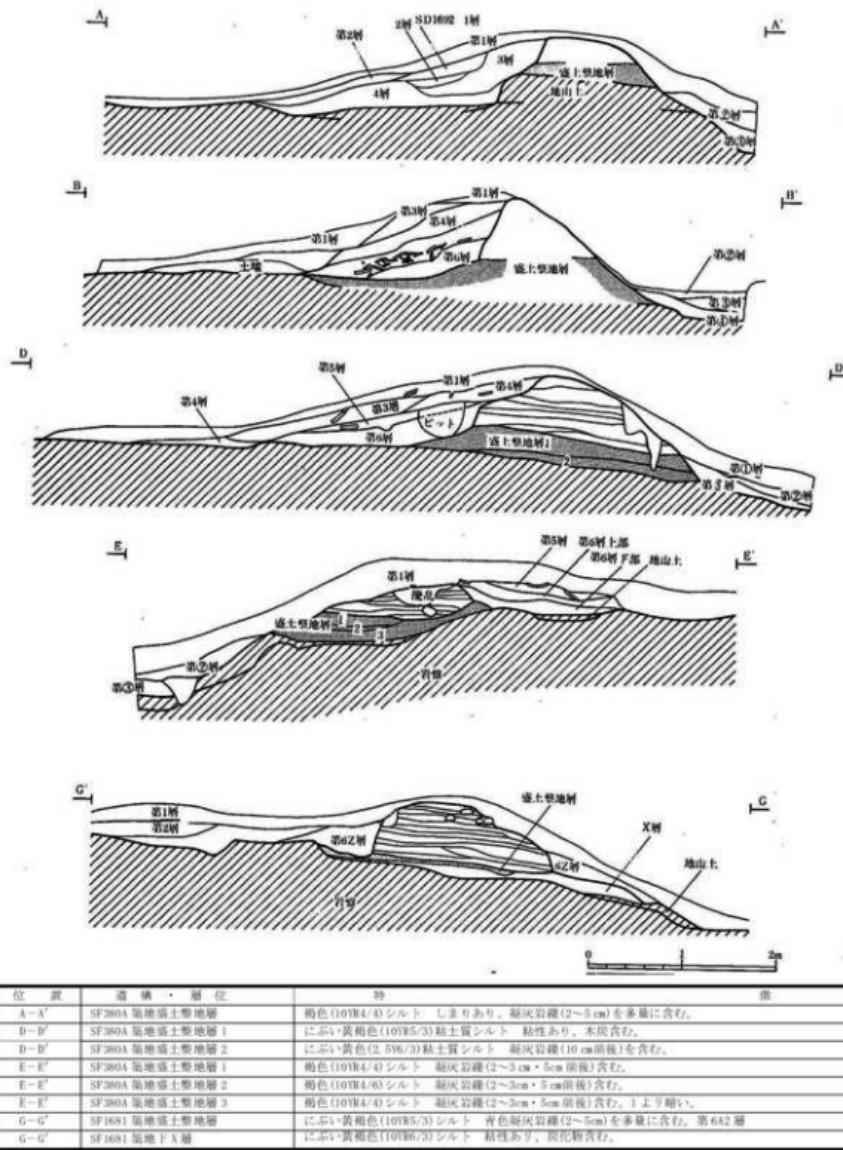
第 3 層：SF380 築地改修後の崩壊土 I。にぶい褐色（10YR5/3・7.5YR5/4）シルト層。軟らかくサラサラしている。厚さ 15~20cm で、SF380 築地西側に堆積している。両築地接続部南側（C-C'）では赤味が強く、その北側では凝灰岩礫（1cm 前後）を含む。

第 4 層：SF380 築地改修後の崩壊土 II。にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト層で、場所によって層相がわずかに異なり、にぶい黄橙色（10YR6/4）・明褐色（7.5YR5/6）の部分もある。厚さ 10~20cm で、SF380 築地西側に堆積している。また、1~5cm 程の凝灰岩礫や凝灰岩粒を含む部分もある（B-B'・D-D'）。

第 5 層：SF380 築地改修直前の大規模な崩壊土。厚さ 15~30cm の赤色（10YR4/8・10YR5/8）もしくは赤褐色（2.5YR4/8）シルト層で、均質なサラサラした層である。焼土と考えられるが、木炭や焼むらはほとんどみられない。SF380 築地西側に分布し、多量の崩壊瓦を含んでおり、焼瓦が多い。両築地接続部から南側約 3m の部分では、第 5 層が約



第 22 図 層序模式図



第 23 図 築地断面

30cmと厚く、上面が平坦でやや硬くなつており、堆積後に上部が SF380B 築地の基礎として整地されていることが確認された。第5層上面は他の部分では削平もしくは崩壊のためすでに失われていた。

第6層：SF380 築地初期崩壊土から SF1681 築地初期崩壊土までを一括した層である。両築地接続部では第6Z層・第6A層・第6B層に細分されるが、他の部分では識別できなかった。

第6Z層は SF1681 築地初期崩壊土と、それに対応すると考えられる SF380 築地の崩壊土である。SF1681 築地両側に堆積している第6Z層は黄褐色（10YR5/8）シルト層で、凝灰岩粒を含み、その量は築地北側より南側の方が多い（G-G'）。厚さは南側が 20~40cm、北側が約 20cm である。SF380 築地接続部南側部分にみられる第6Z層はにぶい黄褐色ないしは褐色（10YR5/4・4/4）シルト層で凝灰岩礫を斑状に含み、上部（Z₁層）が下部（Z₂層）より明るい。

第6A層は SF1681 築地接続部にみられる基礎の盛土整地層である。にぶい黄褐色（10YR5/3・5/4）シルト層で、A₁～A₃層に細分され、A₂層は多量の凝灰岩礫を含む。全体の厚さは約 25cm である。

第6B層は SF1681 築地構築以前の SF380 築地初期崩壊土である。にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト層で、凝灰岩細粒を含む。厚さ 20~30cm で、SF380 築地西側に堆積している。また、SF1681 築地と接続している部分では第6B層上面に厚さ 2~3cm、最大厚 6cm の焼土・木炭層がのっている（SX1694）。

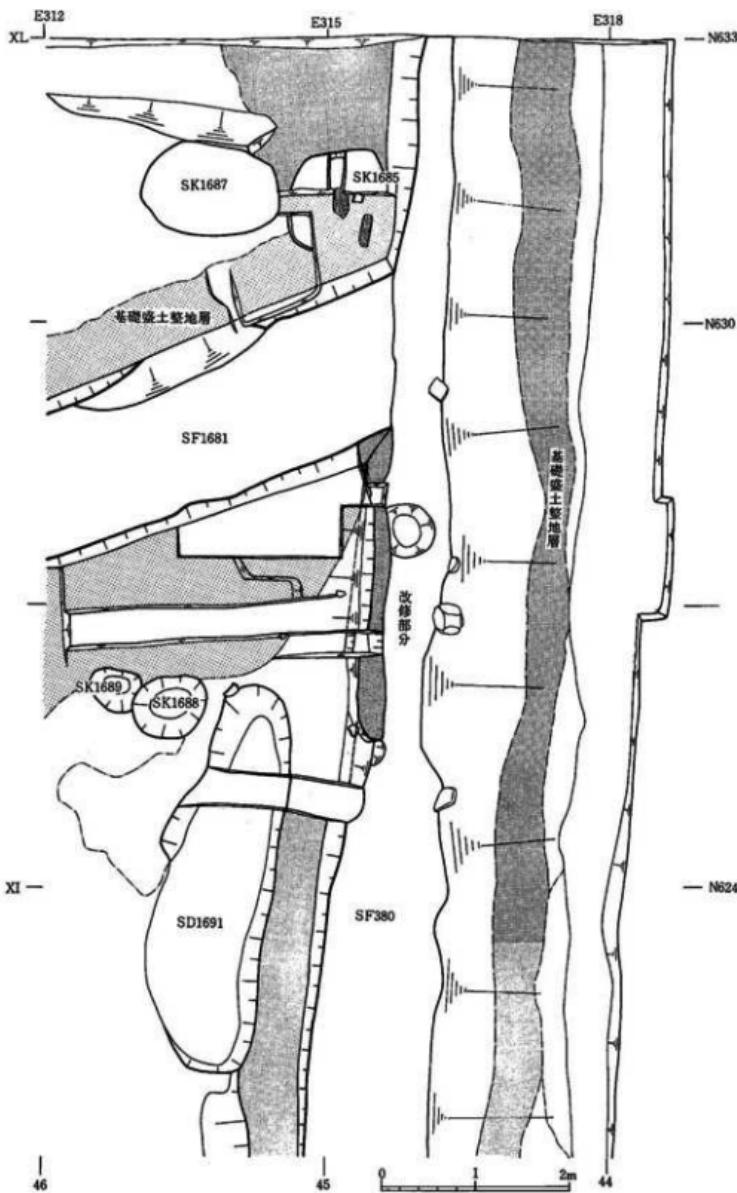
第7層：SF380 築地基礎の盛土整地層である。地山土や旧表土混じりの盛土整地層で、各部分によって層相が異なる。多くの場合厚さ 20~30cm の褐色シルト層である。

SF380 築地東側の堆積層

これらはいずれも築地東側が削平された後に形成された層である。第①層は表土で、SF380 築地西側と共に通している。第②～④層は全体で 15~40cm 過ぎない。各層の特徴を簡単に述べると、第②層は黒褐色（10YR2/3）シルト層、第③層は褐色（10YR4/4）シルト層、第④層は部分的に分布するにぶい黄褐色（10YR5/4）シルト層となる。

3. 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構には築地跡 2、溝 3、土壤 6、焼骨遺構 1 などがある。出土した遺物には土器（土師器・須恵器・須恵系土器）が 78 点、瓦（平瓦・丸瓦・熨斗瓦）が平



第24図 SF380 築地・SF1681 築地接続部

箱で約200箱、鉄鏃が1点ある。遺物は未整理のものが多いので、ここではおもに遺構と土器について述べることにする。

SF380 築地跡

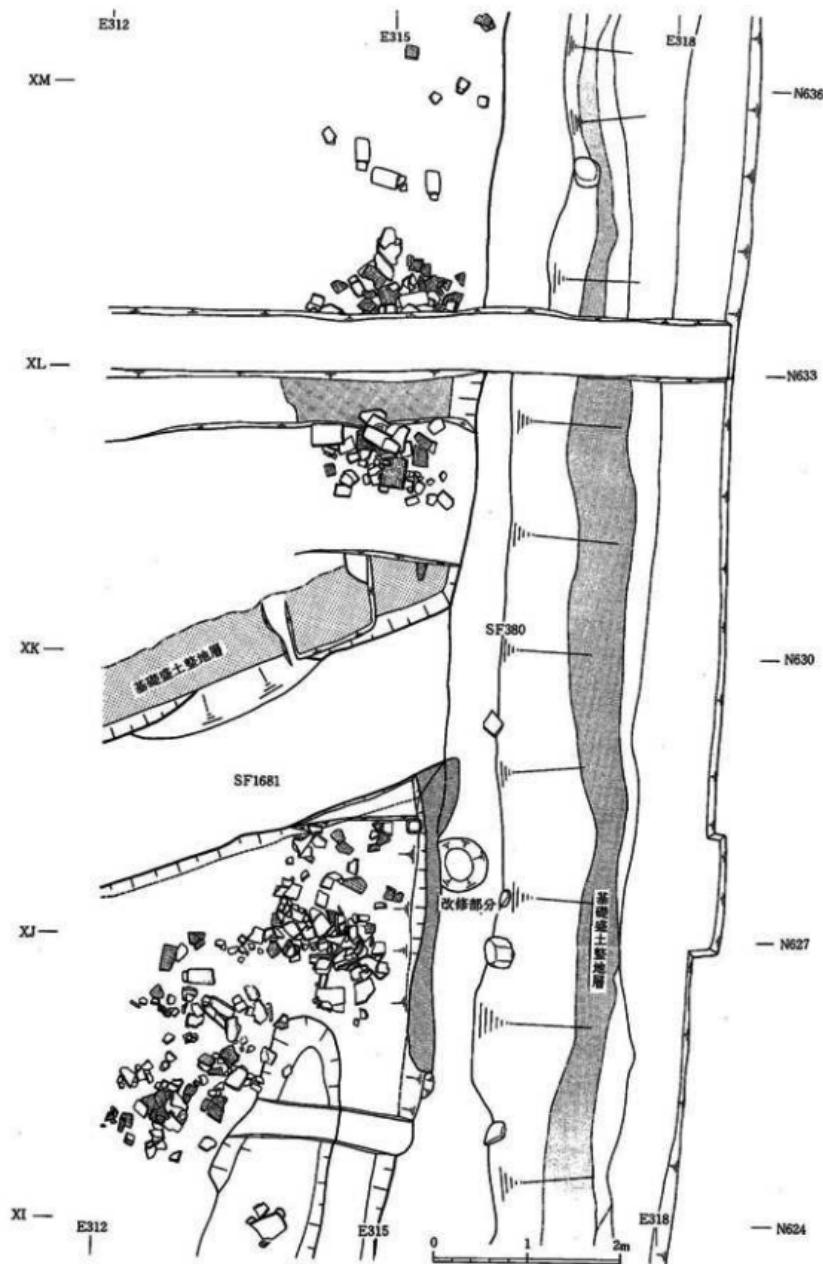
SF380 築地は北側へ延びる舌状小丘陵の尾根東縁部に構築されており、その部分の地形は東側および北側に傾斜している。今回、おもな調査対象としたSF1681 築地との接続部付近は、北側への傾斜が比較的緩やかな部分の北端、その北20mに設定した北トレンチは急斜面部分にあたる。また、SF380 築地の西側部分は、層序の項で述べたように比較的保存が良く、SF1681 築地との接続部付近では第5層の崩壊後に改修が行われたことが判明した。ここでは、構築時のものをA築地、改修時のものをB築地として述べることにする。

SF380A 築地跡：本築地は削平整形と盛土整地による基礎の上に直接本体が構築されており、基壇をもたない。築地本体は長さ36mにわたって検出した(第21・23・24図)。残存高は、SF1681 築地との接続部付近で50~90cmと最も保存が良く、その他の部分では20~30cm程度である。本体の基底幅は東側が削平されているため正確にはわからないが、最も保存の良いD-D'では、2.23mまで確認できた。

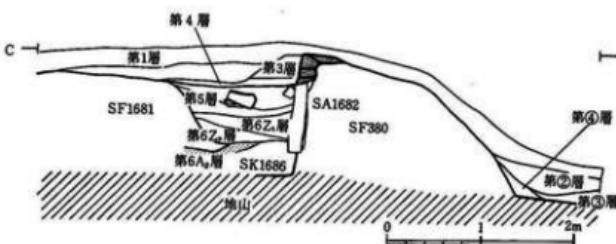
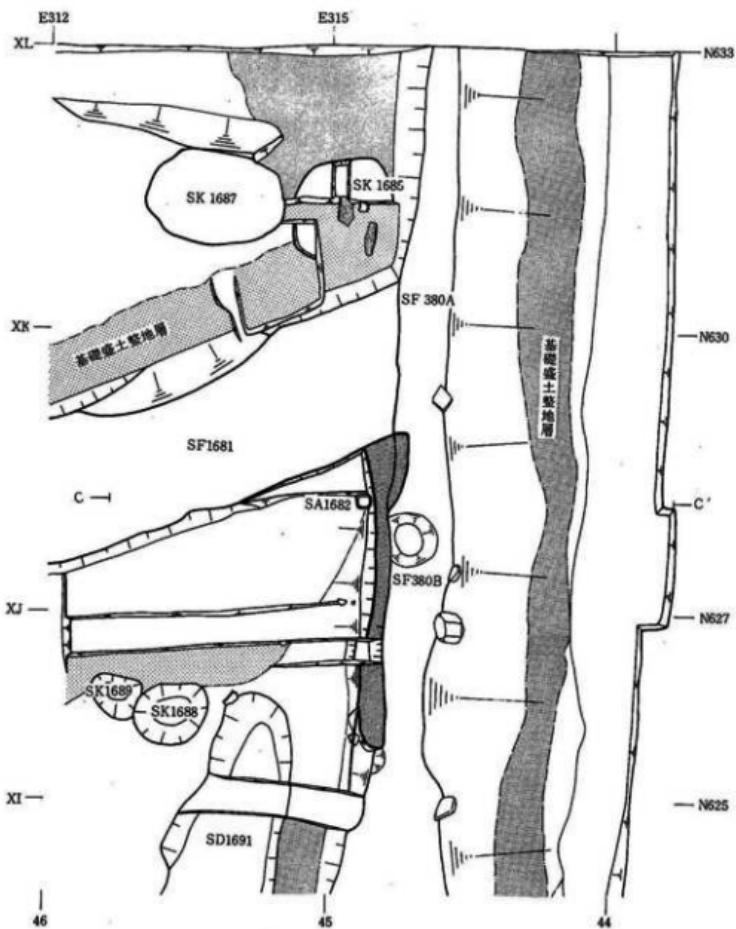
築地本体築成土は2~5cmの凝灰岩礫を多量に含む褐色・にぶい黄褐色・黄褐色シルトである。これらを厚さ5~20cmを単位として積み上げ、版築によって築地本体を構築している。本体の積み手の違い、築地に伴う寄柱については、木の根などによる搅乱や本体およびその基礎に凝灰岩礫を多量に含むことなどから、土の識別が困難で検出することができなかつた。築地の方向は本体西側基底部で計測すると、南北発掘基準線に対し北で5°東へ偏っている。

築地の基礎は自然地形の高い西側部分を削平整形、低い東側部分を盛土整地したもので、築地本体の横断方向はほぼ水平となっている。削平整形の範囲は不規則で明確にはとらえがたい。盛土整地層は築地本体西側基底部付近から本体下の東側斜面部分にみられ、東に向かって厚くなる。築地本体東側は削平を受けているものの、その残存部における盛土整地層の厚さは20~40cmである。盛土整地層は凝灰岩礫を含む褐色もしくは褐色に近いにぶい黄褐色シルト層である。

本体西側基底部における築地基礎上面の南北方向における落差は、SF1681 築地接続部以南が長さ10mで0.67m、接続部以北が長さ10mで0.08mと北が低く、傾斜は緩やかである。これに対して、調査区と北トレンチ間の急斜面部分における築地基礎上面の落差は長さ22mで9.89mと大きい。なお、築地本体・基礎から遺物は出土していないが、築地西側



第25図 第5層における瓦の出土状況



第26図 SF380B 菜地

に堆積している第5層からは、本体上部から崩壊した状態で多量の丸瓦・平瓦・熨斗瓦が出土している（第25図）。それらには完形に近いものや二次的な火熱を受けたとみられる焼瓦が多く含まれている。このような崩壊瓦の出土状況は北トレンチでも同様で、本築地は急斜面部分も含めて瓦葺きであったことがわかる。また、第5層中の丸瓦・平瓦には物A・丸A・B・田A・伊・占などの刻印文字がみられる。第5層は堆積後に上部が整地されているが、この際に廃棄されたと考えられる土師器甕・須恵器杯・甕も出土している。土師器甕は製作にロクロを使用しないもので、須恵器杯は底部切り離しがヘラ切りのものである（第29図9・11）。

SF380B 築地跡：本築地はSF380A築地が火災で崩壊し第5層が堆積した後、その上部を整地して基礎とし、本体を改修したものである（第26図）。確認できたのは、SF1681築地との接続部から南側約3mの部分で、幅20~30cm程である。このため、SF380B築地の基底面はA築地より約70cm高くなっている。改修されたB築地本体西側縁はA築地本体西側縁の延長線とほぼ一致し、基底幅に大きな変更はなかったものと思われる。改修部分は、赤色・黄褐色・にぶい黄褐色シルトを厚さ10~20cm単位に積み上げ（版築）、その上層はA築地本体上に及んでいる。なお、SF380B築地の改修状況を検討するために、一部断ち割り調査（C-C'）を行ったところ、第5層上面で一辺15cm・深さ70cmの方形ピット（SA1682）を検出した。本体の改修部分に一部入りこんでいることから、寄柱穴とも考えられるが、組み合うものが検出されず、確定はできない。

SF1681 築地跡

SF1681築地は外郭北辺築地の東側延長線上にあり、N360m・E315m付近でSF380築地と「ノ」状に接続している（第21・24図）。本築地は、SF380A築地の崩壊土である第6B層堆積後、第6A層によって接続部付近を整地して基礎とし、本体を築いている。また、本築地はSF380A築地との接続部で本体両側に第5層（SF380A築地の崩壊土で、上面がSF380B築地の基礎）が堆積していることから、SF380A築地より新しくB築地より古いことが判明した（第26図）。

本築地も基礎の上に直接本体が構築されており、基壇をもたない。築地本体は長さ13.5mにわたって検出した。残存高は20~65cmで、30cm前後の所が多い。本体の基底幅は最も保存の良い調査区西端付近で1.94mまで確認できた。

築地本体の積み手の違いは2箇所で検出された。本体北側基底部では東側から6.08m・6.22m、本体南側基底部では東側から4.96m（計算推定値）・6.37mである。本体南側の東端が他より約1m短いのは、SF380築地との接続が南側で鋭角（64°）となっていること

によるもので、基本的には約6mを単位としているとみられる。また、3m単位の積み手の違いについても検出に努めたが、遺構の残存状況が悪いためか確認できなかつた。築地築成土は凝灰岩礫を多量に含む褐色・にぶい黄褐色シルトである。これらを厚さ5~20cmを単位として互層に積み上げ、版築によって築地本体を築いている。

築地に伴う寄柱については、柱間寸法・本体との位置・層位関係などの点で確実なものは検出されなかつた。ただ、築地南側のSA1683柱列と北側のSA1684柱列は柱穴の平面形が方形（一辺約30cm）であること、築地本体に対してほぼ対称の位置にあることから、築地構築にかかわるものと考えることもできる。しかし、寄柱とした場合、北側柱列が築地本体下に位置することから、残存する本体より古い築地を想定しなければならなくなる。いずれの柱列についても部分的な検出であるため、今回は可能性の指摘のみにとどめておきたい。築地の方向は本体南側基底部で計測すると東西発掘基準線に対し東で21°北へ偏っている。したがって、SF380築地との接続部における南側の挾角は64°となる。

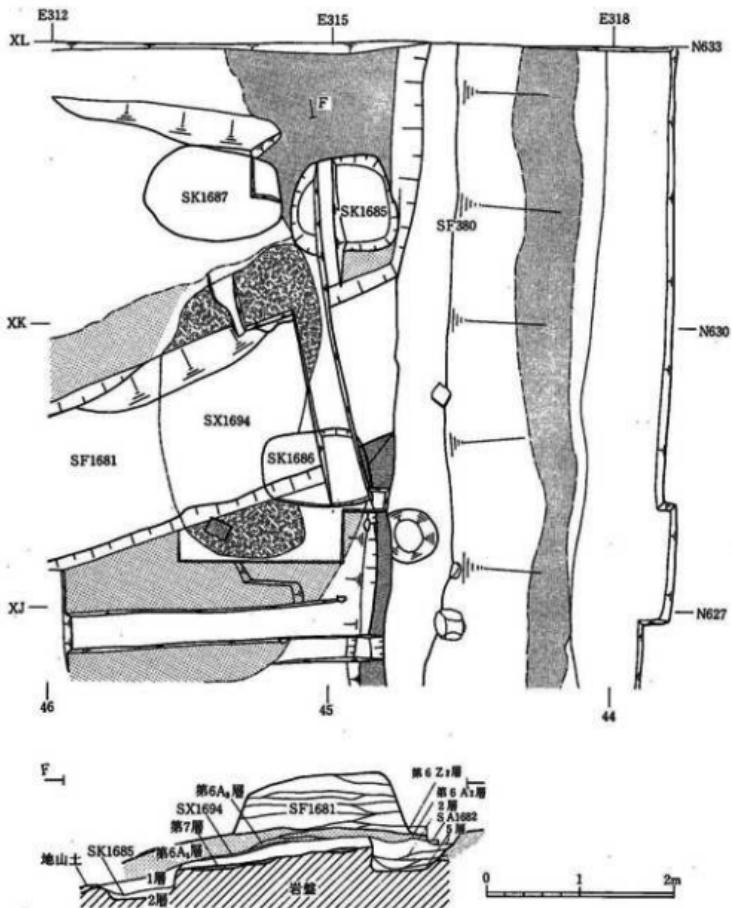
築地基礎はSF380築地と同様に、自然地形の高い部分を削平整形、低い部分に盛土整地している。築地基礎における削平整形は本体の南側にみられるが、その範囲は明確にとらえ難い。盛土整地は岩盤の削平整形の際に生じた窪地（岩盤の剥離による）や築地本体下およびその北側斜面にみられる。その厚さは、SF380築地との接続部付近（F-F'）では5~30cm（第6A₁・2・3層）、築地を断ち割ったG-G'では5~10cm（第6A₂層）である。G-G'の第6A₂層下には厚さ5~20cmのX層および地山がある。X層は炭化物を含み粘性のある黄橙色シルトで、地山や旧表土混じりの整地層とは異なる層相をしている。このX層からは第II期と推定される平瓦II B類が4点出土しており、その内3点は焼瓦である。X層はSF380築地との直接的な層位関係が不明であるが、SF380築地および基礎から古代の遺物が出土していないことを考えると、平瓦が出土している点からSF380築地より新しいと推定される。このように、SF1681築地の基礎整地はSF380築地との接続部付近を除き、地山上面およびX層上面に凝灰岩礫もしくは凝灰岩礫を含む土で盛土整地したもので、築地本体下の横断方向はほぼ水平になっているものの、築地本体の北側では盛土整地層が地山およびX層上面を薄く覆うだけで（最大厚25cm）、自然地形に近い斜面のままになっている。

SF1681築地本体付近の基礎上面は東西方向で西にわずかに低く傾斜しており、築地南側で長さ10mで0.17mの落差がある。

なお、SF1681築地の崩壊土である第6Z層から出土した瓦はいずれも破片で、その数も33点に過ぎず、出土状況も不規則である。したがって、本築地は瓦葺きでなかつたものと推定される。

SF380 築地・SF1681 築地接続部の遺構

SF380・1681 築地接続部付近には、SF1681 築地構築以前の焼土層や土壌があり、他の部分に較べて遺構が集中している（第 27 図）。まず、SF380A 築地の初期崩壊土である第 6 B 層の上面には焼土層（SX1694）が形成され、この焼土層に隣接する北東部分には SK1685 土壌、南東部分には SX1694 焼土層を切って SK1686 土壌が掘られている。これら



第 27 図 SF380 築地・SF1681 築地接続部の遺構

の焼土層・土壤を SF1681 築地の盛土整地層である第 6 A 層が覆っている。その後、第 6 A 層を切って SK1685 土壤の西側にあたる部分に SK1687 土壤が掘られ、第 6 Z 層に覆われる。これらの土壤について、当初は柱穴の可能性も考えたが、柱痕跡が検出されないこと、同一面における組み合わせが建物跡の柱穴としての配置を示さないこと、以下に述べる形状・埋まり方などからいざれも性格は不明とせざるをえない。

SX1694 焼土層：第 6 B 層上面で検出され、第 6 A 層に覆われる。厚さ 2 ~ 3 cm、最大厚 6 cm の赤褐色をした焼土層で、木炭を含んでいる。その分布は南北約 3.3m、東西約 1.6 m の不整梢円形をしている。明瞭な焼け面は確認されなかった。

SK1685 土壤：第 6 B 層上面で検出され、第 6 A 層に覆われる。平面形が隅丸台形の土壤で、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり上部で開く。規模は南北 1.0m、東西 1.1m、深さ 35cm である。堆積土はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルトで、上部は凝灰岩礫（3 cm 前後）を少量、下部は灰オリーブ色 (10YR6/2)の細砂をブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

SK1686 土壤：SF1681 築地接続部の状況を知るための断ち割り調査の際、その一部を検出した土壤である。第 6 B 層上面の焼土層を切り、第 6 A 層に覆われる。検出部分から本土壤の平面形は隅丸長方形と推定される。底面はほぼ平坦である。壁は直立・内湾する部分などがあり、上部で開く。規模は南北 0.82m、東西 1.00m 以上で 1.10m 程度と推定される。深さは 30cm である。堆積土は 1 ~ 5 層に細分される。1 ~ 4 層はにぶい黄橙色から褐色のシルトないしは砂質シルトで、2・3 層は凝灰岩礫、4 層は焼土・木炭を含んでいる。5 層は壁（岩盤）の崩れとみられる灰オリーブ色(10YR6/2)の細砂で、壁ぎわに多く堆積している。5 層の特徴などから、この土壤は自然堆積によって埋まったものと推定される。遺物は出土していない。

SK1687 土壤：第 6 A 層で検出され、第 6 Z 層に覆われる。本土壤は北東隅の一部を掘り下げただけである。平面形は東西に長い梢円形で、その規模は南北 0.96m、東西 1.48m である。土壤内堆積土はオリーブ褐色 (2.5Y4/6) 砂質シルトで、凝灰岩礫（2 ~ 3 cm）を含んでいる。遺物は出土していない。

その他の遺構

両築地接続部以外の遺構としては SK1688・1689・1690 土壤、SD1691・1692・1693 溝、SX1695 烧骨遺構がある（第 21 図）。

SK1688・1689 土壤：両築地接続部南側において、SF1681 築地基礎上面で検出され、第 5 層に覆われる。平面形は両者とも梢円形で、底面・壁は丸底状をしている。規模は S

K1688 土壌が南北 64cm・東西 77cm・深さ 10cm、SK1689 土壌が南北 45cm・東西 52cm・深さ 9 cm である。両者とも赤褐色土の混じる褐色土で埋まっていた。

遺物は SK1688 土壌から平瓦 II B 類 6 点、丸瓦 II 類が 4 点出土している。SK1689 土壌からは遺物は出土していない。

SK1690 土壌：SF1681 築地南側の築地基礎上面で検出され、第 6 Z 層に覆われる。本土壌は本体南側と築地基礎を一部掘り込んでいる。平面形は隅丸方形で、底面・壁は丸底状をしている。規模は南北 58cm・東西 78cm・深さ 12cm であるが、築地本体を掘り込んでいる部分では深さが 31cm となっている。焼土・木炭を含む暗褐色（10YR3/3）シルトで埋まっている。須恵器杯 1 点・平瓦 II B 類 1 点が出土した。須恵器杯はヘラ切りによって底部が切り離されており、その後体部下端に手持ちヘラケズリが加えられているものである（第 30 図 2）。

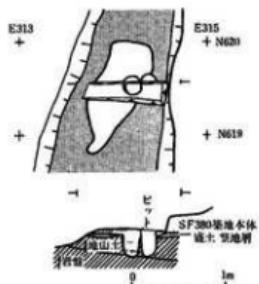
SD1691 溝：調査区中央部の SF380 築地西側において、第 6 層上面で検出された。第 5 層との関係は明確でないが、堆積土は SK1688・1689 土壌と近似しており、赤褐色土の混じる褐色土である。この溝の範囲については、その南限を N622m 付近にみられる軽い段までと考えたが、溝としての東肩が続く N618m 付近までと推定される。その場合の規模は幅 1.22m・長さ 8.06m・深さ約 30cm である。溝の横断面は上部で広がる「U」字状で、縦断面は緩やかに傾斜し北側が低くなっている。遺物としては平瓦 II B 類 8 点、丸瓦 II B 類 3 点が出土している。

SD1692 溝：調査区北側の SF380 築地西側で長さ 4.5m にわたって検出された。この溝は築地本体西側及び築地基礎を削って掘り込まれており、第 2 層に覆われる。溝の南端は N637.5m 付近で、北側に向かって幅が広くなり、調査区外に延びている。しかし、その延長は調査区の北 20m に設定した北トレーンチには及んでいない。検出部分の横断面は上部で広がる「U」字状で、縦断面は北側に傾斜して低くなる。溝の最大幅は 3.18m で、深さは 70cm である。堆積土は 4 層あり、褐色ないしは黄褐色のシルトである。遺物は出土していない。

SD1693 溝：調査区西側の SF1681 築地北側で、長さ 3 m にわたって検出した。この溝は築地基礎・地山を一部削っており、第 1 層に覆われている。溝の東端は E306m 付近で西側に向かって幅が広くなり、調査区外に延びている。検出部分の横断面は上部で広がる「U」字状で、縦断面は西側に傾斜して低くなる。溝の最大幅は 2.92m で、深さは 79cm である。溝底面には第 2 層に似た黒褐色シルトが堆積している。遺物は出土していない。

SX1695 燃骨遺構：調査区中央部の SF380 築地本体西側基礎上面で検出され、第 6 層に覆われている。平面形は南北に長い不規則な形をしており、浅い窪地状で中央部がピッ

ト状に深くなっている。規模は南北 127cm・東西 50cm・深さ 7 cm で、ピット状部分は直径 15cm・深さ 23cm である。このピットを伴う窪地内には骨片と木炭を含んだ暗褐色シルトが埋まっており、上面での確認状況は骨片が一面に散らばった様相をしていた。これらの骨片からは頭蓋骨と四肢骨が確認され、その特徴から人骨と推定される⁽¹⁾。また、骨片には亀裂があり青灰色をしている部分があることから火熱を受けたものであることが知られ、広い意味での火葬骨と考えられる。



第 28 図 SX1695 焼骨遺構

註 1 阿部恵氏の教示による。

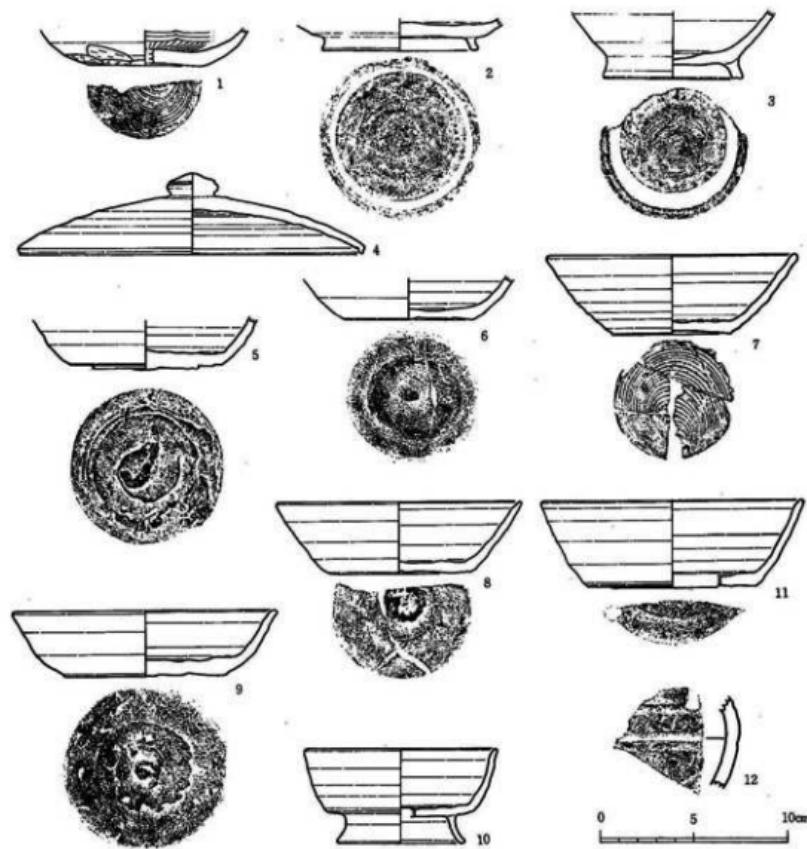
堆積層出土の土器

SF380 窪地西側および SF1681 両側の第 1 ~ 6 層、SF380 窪地東側の第①層からは土師器・須恵器・須恵系土器が出土している。これらには復元可能な資料と破片資料があり、両者を含めた数は土師器が杯 11 点・高台杯 1 点・甕 22 点、須恵器が杯 11 点・高台杯 2 点・蓋 2 点・瓦巣⁴ 1 点・甕 12 点、須恵系土器が杯 9 点・高台杯 4 点、その他種類不明の杯が 2 点あり、合計 77 点である。第 29・30 図に示したのは復元可能な資料と特徴的な破片資料で、その他の破片資料は表 3 にまとめた。

このように出土土器の全体量はあまり多くないが、その量を層位的にみると第 1・2 層が比較的多く、第 4・5 層がそれに次いでおり、第 3・6 層は極めて少ない。また、これらの資料についてその内容を土器の組み合わせやそれぞれの特徴などについて層位的にみると次のようになる。すなわち、第 5 層以下の資料では製作にロクロを使用した土師器はみられず、須恵器杯は底部の切り離しがヘラ切りのものに限られ（第 29 図 9・11）、須恵系土器を含んでいない。それに対し、第 1~4 層の資料には各種の土師器・須恵器・須恵系土器がみられ、土師器や須恵器の杯に底部切り離しが回転糸切りのものが含まれている（第 29 図 1・7）。また、須恵器杯の底径は第 1~4 層出土の 4 点が 6.3・6.8・7.4・8.0cm（第 29 図 5~8）であるのに対し、第 5 層出土の 2 点は 8.5・9 cm（第 29 図 9・11）で、第 1~4 層のものに較べ第 5 層のものの方が大きい。さらに、須恵器杯の口径と底径の判明するものについて、口径 1 に対する底径の比率をみると、第 2 層の第 29 図 7 は 0.47、8 は 0.57 であるが、第 5 層の 9 は 0.61、11 は 0.64 で、第 5 層のものの方が大きい。このように、今回出土した土器は量的には多くないものの、第 1~4 層出土の土器群と第 5 層以下出土の土器群には相違が認められる。

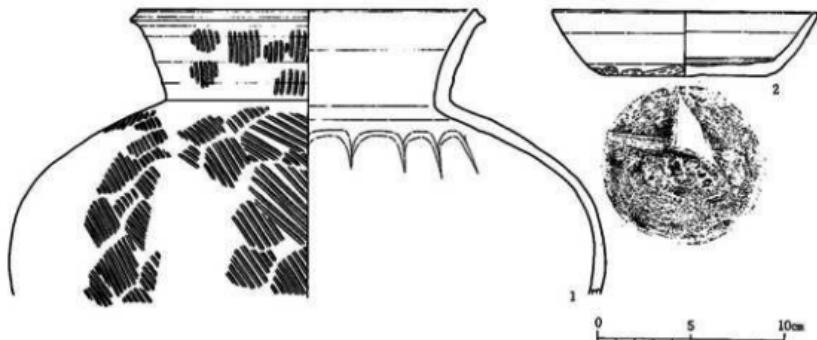
種類	部位	器面調査		第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	第6層	表記	計
		外面	内面								
土器	杯	体 部	ロクロナデ - ミガキ・黒色 磨 滅 - ミガキ・黒色	2 1	1						2 2
		体～底部	磨 滅 - ミガキ・黒色							1	1
	底 部	手持ちケズリ - ミガキ・黒色 回転あ切り - ミガキ・黒色	1 2	2							1 4
	高台部	ロクロナデ - ミガキ・黒色					1				1
漆器	口～底部	ロクロナデ - ミガキ・黒色 手持ちケズリ -	1								1
		頭 部	ロクロナデ - 磨 滅		2						2
	口縁部	ナ デ - ナ デ 磨 滅 - 磨 滅	1 1	2							1 3
		胸 部	刷毛目 - ナ デ 磨 滅 - ナ デ 磨 滅 - 黒 色 磨 滅 - 磨 滅	3	2		1 2	3		1	9
	底 部	磨 滅 - 磨 滅 木葉痕 - ナデツケ	1					1			1 1
	杯	口縁部	ロクロナデ - ロクロナデ	2				1			3
漆器	体 部	ロクロナデ - ロクロナデ	1								1
	底 部	手持ちケズリ - ロクロナデ	1								1
	腹	ロクロナデ - ロクロナデ ナ デ - ナ デ 平行叩き - ナ デ 平行叩き - 不明当日 ケズリ - 青梅皮当日	1	5	1					1	1 1 6 1 1
		胸～底部	平行叩き - ナ デ		1						1
	蓋	ツマミ ロクロナデ - ロクロナデ		1							1
	杯	口～底部	ロクロナデ - ロクロナデ 回転あ切り -	1							1
土器	口縁部	ロクロナデ - ロクロナデ	1				1				2
		体 部	ロクロナデ - ロクロナデ				1				1
	底 部	回転あ切り - ロクロナデ 磨 滅 - 磨 滅	3 1			1					3 2
	高台部	ロクロナデ - ロクロナデ 磨 滅 - 磨 滅	1				2				2 1
不明	杯	口縁部	磨 滅 - 磨 滅						1		1
		底 部	磨 滅 - 磨 滅	1							1
合 計				26	18	1	9	6	1	3	64

表3 第51次調査土器破片資料



番号	層位	種類	器種	特徴	高	口徑	底径
1	第1層	土師器	片	ロクロナデ 回転目切り → 圓手持ちケズリ 内面：《ガキ・黒色	-	-	5.8cm
2	第1層	須恵器	高台片	ロクロナデ 底部回転ケズリ → 付け高台 → 高有脚ロクロナデ	-	高台径 8.20cm	
3	第1層	須恵器	高台片	ロクロナデ 底部回転目切り → 付け高台 → 高有脚ロクロナデ	-	高台径 7.4cm	
4	第2層	須恵器	盤	ロクロナデ ツマミ：今や縦平な宝珠状 口縁端部：折り曲げ	4.3cm	18.2cm	-
5	第2層	須恵器	片	ロクロナデ ヘラ切り(二度切り)	-	-	8.0cm
6	第2層	須恵器	片	ロクロナデ ヘラ切り	-	-	6.8cm
7	第2層	須恵器	片	ロクロナデ 回転目切り 従面部外側不明墨書あり	4.2cm	13.4cm	6.3cm
8	第4層	須恵器	片	ロクロナデ ヘラ切り	3.8cm	13.0cm	7.4cm
9	第5層	須恵器	片	ロクロナデ ヘラ切り	3.5cm	14.0cm	8.5cm
10	第5層	須恵器	高台片	ロクロナデ 底部回転ケズリ → 付け高台 → 高有脚ロクロナデ 図上復元口径：10.3cm			
11	第5層	須恵器	片	ロクロナデ ヘラ切り	4.6cm	14.0cm	9.0cm
12	第5層	須恵器	瓦底	ロクロナデ 波状文・無い壁 吉墳時代	-	-	-

第29図 出土土器 I



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴	器高	口径	底径
1	第5層 須恵器	甕	外腹：平行印き一ロクロナガ 内面：押え・当目一ロクロナガ	—	18.0cm	—	
2	SF380土壌 須恵器	杯	ロクロナガ 底部へラ切り一軽いナガ 体部下端手持ちケズリ	3.5cm	14.2cm	8.7cm	

第30図 出土土器II

なお、第29図7と12の須恵器について補足して説明しておきたい。7は杯であるが、底部外面に墨書文字とみられるものがある。判読はできなかった。12はSF380築地東側の第①層出土のもので、瓦泉もしくは壺の胴部破片である。胴中央部には軽い段があり、その上部には筋の細かい波状文が描かれている。この須恵器は他の土器群と時期的に異なり、器形と外面の特徴から古墳時代中期末から後期初頭のものと推定され、多賀城造営以前のものである。

4. 考 察

今回の調査で検出した遺構には築地跡2、土壌6、溝3、焼骨遺構1などがある。また、SF380築地とその西側には第1～7層・X層、SF380築地東側には第①～④層の堆積がみられる。これらの堆積層のうち、西側の第1層は表土、第2層は自然堆積層、第3～7層とX層は築地構築にかかわる層および築地崩壊土である。それに対して東側の第①～④層はSF380築地東側が削平された後の堆積層である。

したがって、ここでは遺構と第1～7層・X層の関係を整理し、区画施設の変遷と特徴について現段階での検討を加え問題点の指摘を行うこととする。なお、遺物については未整理のものが多く、その詳細は後日に期することにする。

(1) 遺構の変遷

第31図は発見された遺構と層の重複関係を示したものである。これらのうち、まず区画施設とその基礎となっている盛土整地層の変遷を整理すると、SF380A築地と第7層→SF1681築地と第6A層→SF380B築地と第5層、の順となる。このうち層位関係や出土遺物からある程度の年代推定が可能なものは、SF380B築地・SF1681築地である。

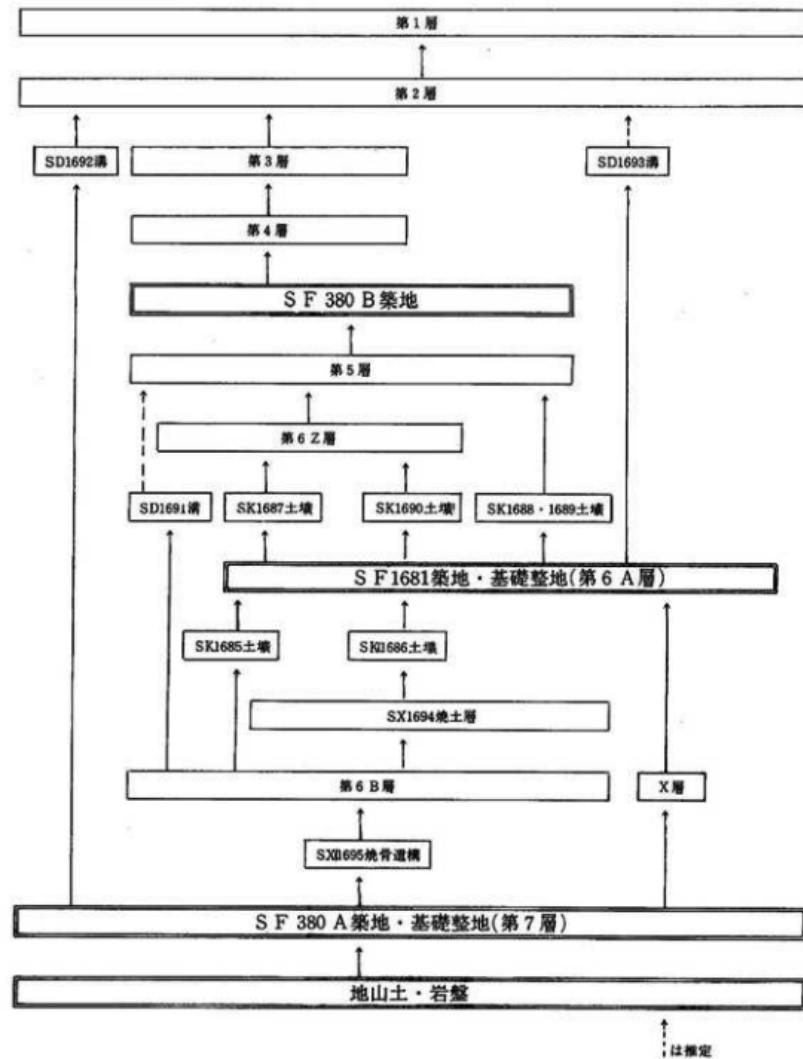
SF380B築地はSF380A築地の大規模な崩壊(第5層)の直後に改修されたものである。第5層は焼土と考えられる赤色もしくは赤褐色の均質なシルトで、層中に築地屋根から崩壊したとみられる多量の瓦が含まれている。それらの瓦群は第II期と推定されるもので、二次的な火熱を受けた焼瓦も多い。第5層は層相と焼瓦を多量に含むことから、その起因は火災によるものと考えられる。第5層の上部はSF380A築地の改修の際に整地されており、その時に廃棄されたと考えられる土師器甕・須恵器杯・甕が出土している。土師器甕は製作にロクロを使用していないもの、須恵器杯はロクロからの切り離しがヘラ切りで、口径に対する底径の比が比較的大きいものである。これらは「多賀城跡出土土器の変遷」におけるA~C群土器の幅におさまるもので、8世紀後半を中心とした頃のものと考えられる。これらのことから、第5層の形成は第II期以降における8世紀後半を中心とした時期の大規模な火災によるものと考えられ、その原因は政府跡第II期終末の火災と同様に宝亀11(780)年の伊治公皆麻呂の乱にかかるものと推定される⁽²⁾。したがって第5層堆積後に改修されたSF380B築地はその直後、すなわち第III期のものと考えられる。

第II期終末の第5層より古いSF1681築地については、その下層のX層から第II期と推定される焼瓦が出土していることから、第II期の期間中に構築されたことがわかる。また、その構築以前に焼瓦が生じうる何らかの要因があったことも知られる。

SF380A築地については、本体およびその基礎から遺物は出土していないが、上述の第5層がSF380A築地の崩壊土であることから、第II期には瓦葺きの築地として存在していたものと思われる。

以上により区画施設については、まずSF380A築地が第II期に瓦葺きで存在し、その後SF1681築地が構築され、第II期終末の火災によってSF380A築地が大規模に崩壊し、その改修として第III期にSF380B築地が築かれる、といった変遷と年代が把握される。

区画施設以外の遺構・層については、区画施設の変遷と年代を基準にすると、A: SF380A築地構築以後で、第II期の期間中に構築されたSF1681築地以前のもの、B: SF1681築地構築以後で第II期終末の第5層堆積以前のもの、C: 第III期に構築されたSF380B築地以後のもの、に分けられる。このほかに、D: SF380A築地構築以後である



第31図 第51次調査発見遺構の重複関係

が詳しい年代的位置づけができないものもみられる。

A : SF380A 築地西側基礎上面で確認された SX1695 燃骨遺構があり、第 6 層に覆われる。また、SF1681 築地が SF380A 築地に接続して構築される部分の第 6 B 層上面で確認された SX1694 燃土層・SK1685・1686 土壌があり、これらは第 6 A 層に覆われる。このほか、第 6 B 層との関係は不明であるが、SF1681 築地下の X 層がある。

B : SF1681 築地南側基礎上面で確認された SK1690 土壌、SF380A 築地との接続部北側の基礎上面で確認された SK1687 土壌、その南側の基礎上面で確認された SK1688・1689 土壌がある。このうち、SK1687・1690 土壌は第 6 Z 層に覆われるが、SK1688・1689 土壌は第 6 Z 層との関係は不明である。

C : 第 1 ~ 4 層である。第 3 ・ 4 層は SF380B 築地の崩壊土、第 2 層は自然堆積層、第 1 層は表土である。

D : SD1691・1692・1693 溝がある。SD1691 溝は、SF380 築地の西側に位置し、第 6 B 層より新しい。第 5 層との関係は明確にし得なかったが、堆積土が類似することから SK1688・1689 土壌と一連のものかもしれない。SD1692 溝は SF380A 築地より新しく、第 2 層より古い。溝内に第 3 ・ 4 層の堆積がみられないことから、それより新しい可能性がある。SD1693 溝は SF1681 築地より新しく、第 1 層より古い。溝の底には第 2 層に似た黒褐色土が堆積していることから、第 2 層以前でそれに近い頃のものかと考えられる。

(2) 区画施設の特徴

今回の調査対象地区は、外郭東辺の東側に位置し南北に延びる築地状高まりと、外郭北東隅から外郭北辺の延長線上に延びる築地状高まりの接続する部分であった。調査はこれらの築地状高まりの構造・変遷・区画対象を解明することなどを目的として実施した。その結果、これらの高まりは急斜面部分に位置するものも含め築地であることが判明した。またこれらの区画施設は、まず初めに南北に延びる SF380A 築地が構築されて第Ⅱ期には瓦葺きで存在し、つぎに第Ⅱ期の期間中に SF1681 築地が SF380A 築地に「ノ」状に接続して構築され、第Ⅱ期終末に SF380A 築地が火災に伴って大規模に崩壊した後、第Ⅲ期に SF380B 築地として改修される、という変遷をたどったものと推定された。これらの築地の特徴を整理すると次のようになる。

SF380 築地

1. 築地は北側に延びる丘陵尾根の東縁部に構築されており、その方向は南北発掘基準線に対して北で約 5° 東に偏っている。

2. 築地本体は削平整形と盛土整地による基礎の上に直接構築され、基壇は形成されていない。

3. 築地の規模を本体基底幅でみると、最も保存のよい所で 2.23mまで確認することができた。なお、今回の調査区から南側約 100mの部分を対象とした第 17 次調査では基底幅が 8 尺以上であることを確認している。⁽³⁾

4. 築地本体は凝灰岩礫を多量に含む土を互層に積んだ版築によって構築されている。保存状態が悪かったためか積み手の違いは検出できなかった。

5. 築地は崩壊土における瓦の出土状況から瓦葺きであったと推定される。寄柱は確認されなかった。

6. 築地には第 II 期終末の火災による大規模な崩壊があり、その後崩壊土の上部を整地して本体の改修を行っている。このため、改修後の築地基礎上面は確認部分で約 70cm 高くなっているが、基底幅には大きな変更はなかったものと推定される。

SF1681 築地

1. 築地は外郭北辺の東延長線上に構築され、SF380 築地に「A」状に接続されている。築地の方向は東西発掘基準線に対して東で約 21° 北へ偏っている。したがって、両築地接続部における南側の挾角は約 64° となっている。

2. 築地本体は削平整形と盛土整地による基礎の上に直接構築され、基壇は形成されていない。

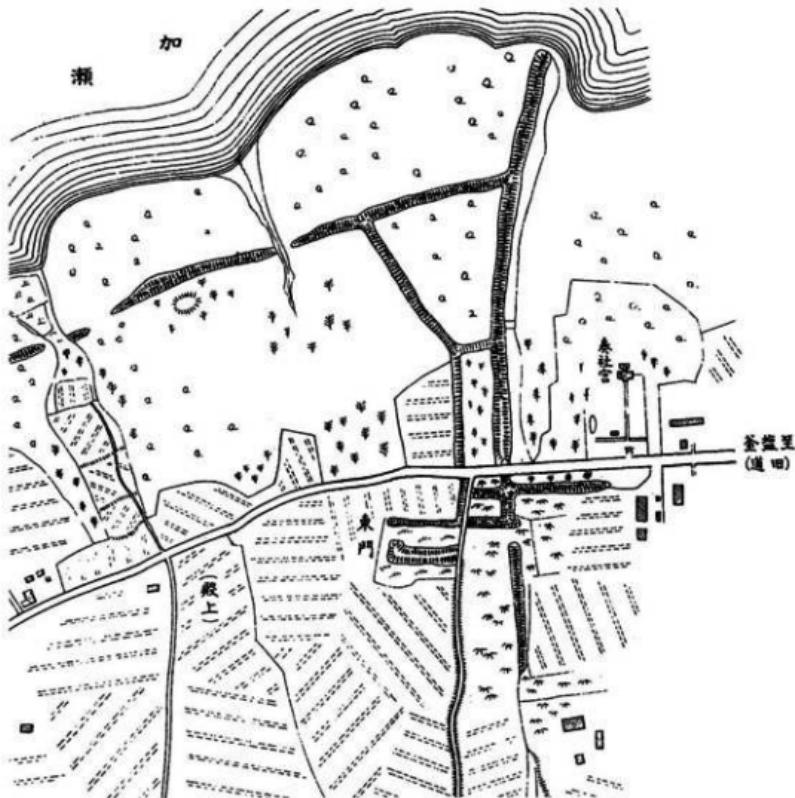
3. 築地の規模を本体基底幅でみると、最も保存の良い所で 1.94mまで確認することができた。著しい削平や崩壊がみられないことから、基底幅は 7 尺程度と推定される。

4. 築地本体は凝灰岩礫を多量に含む土を互層に積んだ版築によって構築されている。積み手の違いは約 6 m を単位として検出された。

5. 築地は崩壊土における瓦の量とその出土状況から瓦葺きではなかったと推定される。寄柱については確実なものは検出されなかった。

6. 築地本体に構築後の改修痕跡はみられない。

以上のように、両築地は基礎の上に本体が直接構築され、その築成土に多量の凝灰岩礫を含んでいる点で共通している。築成土にこれほど多量に凝灰岩礫を含む土を用いているものは、現在のところ第 49 次で調査した丸山地区の北辺築地のみである。一方、両築地にはつぎのような相違点もみられる。すなわち、SF380 築地は瓦葺きで、SF1681 築地に較べて基底幅も大きく、火災後に改修されるなど、構造・規模・維持のされ方の点での相違がみられる。これらは両築地の相対的な重要度にかかわるものかもしれない。



第32図 「多賀城跡平面図」

最後に、両築地の区画対象について若干の見通しと今後解決すべき問題点を述べることにする。これまで実施してきた調査では、第17次調査の報告にみられるように「SF380築地は多賀城の東外郭線とは考えられず、総社宮付近の多賀城と隣接した古代の他の施設を区画するものであろう。」と推定してきた。⁽⁴⁾しかしながら、SF380築地は北へ延びる丘陵尾根の東縁部に位置し、東側は斜面となっているのに対して幅はさして広くないが築地の西側には平坦面がみられる。さらに、調査の最終段階で実施した踏査でSF380築地の南側への延びを検討したところ、東門の東側で途切れさらに南に続いていることが確認された。その状況は、大正14年に刊行された「多賀城跡平面図」に示された遺構のあり方とほぼ一致し、築地跡がほとんど当時のままに残っていることを知ることができた。したが

つて、これらの点を重視すると、SF380 築地は多賀城の外郭東辺を区画する施設である可能性が高い。その場合、外郭東辺の区画施設としては従来の SF300 築地とその東に位置する SF380 築地の 2 条が存在することになる。外郭東辺築地が二重構造であったのかそれとも両者が時期的な変遷として存在するのか、さらにこのような外郭区画施設の状況が東辺のみに存在するのか多賀城の外郭区画施設全体にみられるのかの解明はきわめて重要な問題であり、今後の調査の大きな課題となつた。また、今回の調査部分に限つて言えば、外郭東辺の区画施設と考えられる SF380A 築地構築時に区画された多賀城の範囲は、第Ⅱ期の期間中に構築された SF1681 築地によって北側が狭められたとみることができる。その要因の解明も今後の問題である。なお、第 27 次調査において SF380 築地の東側で検出された建物跡群⁽⁶⁾の性格も今後明らかにしていく必要があろう。

註 1 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要IV』1980 p. 1~38

2 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡本文編』1982 p. 384・400

3 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—昭和 47 年度発掘調査概報—』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972 p. 49~67

4 このような推定は第 13・17・27 次調査で行つてきた。また、第 27 次調査では SF380 築地の東側に沿つた SD862 溝が検出されている。SF380 築地については多賀城と接した別の一画があつたことが知られるとしながらも、「この溝はあるいは、多賀城外郭に伴い、築地の一まわり外側にあつて何らかの区画施設の役割を果していたものであるかも知れない。」と外郭東辺の区画施設の可能性を指摘している。今回の調査では SF380 築地の東側を調査していないので、SF380 築地と SD862 溝との関係を明らかにするには至らなかつた。

a 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡—昭和 46 年度発掘調査概報—」宮城県多賀城跡調査研究所年報 1971 p. 42

b 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡—昭和 47 年度発掘調査概報—」宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972 p. 49~67

c 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡—昭和 50 年度発掘調査概報—」宮城県多賀城跡調査研究所年報 1975 p. 31~36

5 「多賀城址平面図」1939

6 註 4 c に同じ。

V 付 章

1. 関連研究・普及活動

昭和 61 年度は多賀城跡の発掘調査のほかに、以下のような関連研究や普及活動を行った。

(1) 多賀城関連遺跡の発掘調査

当研究所では多賀城に関連する古代遺跡について計画的な調査研究を実施している。本年度は多賀城関連遺跡調査第 3 次 5 ヶ年計画の第 3 年次にあたり、昭和 61 年 8 月 19 日から 11 月 19 日まで宮崎町東山遺跡の第 1 次発掘調査を行った。事業費は 7,800 千円（うち 50% 国庫補助）である。その成果は多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 12 冊『東山遺跡 I』として刊行する。

(2) 多賀城跡の環境整備

当研究所では多賀城跡の保存・活用を目的として計画的に環境整備を実施している。本年度は環境整備第 4 次 5 ヶ年計画の第 2 年次にあたり、政庁南方地区と雀山地区を対象とした。政庁南方地区では第 43・50 次調査（昭和 58・61 年度）で外郭南門に通ずる道路跡を検出しており、このデータに基づき政庁第 II 期の道路跡の復原を行った。また、雀山地区では修景工事を実施した。事業費は 27,000 千円（うち 50% 国庫補助）である。

(3) 遺構調査研究事業

本年度の事業は東北古代城柵官衙遺跡の外郭区画施設に関する総合研究 5 ヶ年計画の 4 年次にあたり、事業内容は主として検出遺構のデータ収集に主眼を置いている。本年度は宮城県城生遺跡、秋田県秋田城跡などを対象として、実地調査および航空写真・遺構写真実測図などの資料収集を行った。総経費は 1,171 千円（県単費）である。

(4) 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するため下記の現地説明会を実施した。

「多賀城跡第 50 次調査について」 昭和 61 年 8 月 2 日 高野芳宏

「東山遺跡第 1 次調査について」 昭和 61 年 9 月 27 日 白鳥良一

(5) 他機関の発掘調査などへの協力

遺跡名(所在地)	期間	調査機関	協力所員
赤井遺跡(宮城県矢本町)	61.7・8	矢本町教育委員会	進藤・白鳥・高野・丹羽・古川(雅) ・後藤・菅原・古川(淳)
名生館遺跡(宮城県古川市)	61.7・8	古川市教育委員会	進藤・白鳥・高野・丹羽・後藤・古 川(雅)・古川(淳)・菅原
三十三間堂遺跡(宮城県亘理町)	61.11	宮城県文化財保護課	進藤秋輝
西方前遺跡(福島県三春町)	61.12	三春町教育委員会	後藤秀一
郷楽遺跡(宮城県利府町)	61.12	宮城県文化財保護課	進藤・白鳥・高野・丹羽・後藤
夏井廃寺等の瓦検討	62.3	福島県立博物館	進藤秋輝・高野芳宏

(6) 講演会などへの協力

- 古川雅清 61. 6. 15 「遺跡保存整備課程」埋蔵文化財発掘技術者専門研修 奈良国立
文化財研究所埋蔵文化財センター
- 丹羽 茂 61. 8. 23 「縄文時代の道具ー土器ー」東北歴史資料館開放講座
- 後藤秀一 61. 8. 23 「縄文時代の道具ー石器ー」東北歴史資料館開放講座
- 白鳥良一 61. 8. 27 「古代多賀城跡について」古川市中央公民館 郷土史講座
- 白鳥良一 61. 8. 30 「縄文時代の集落と住居」東北歴史資料館開放講座
- 白鳥良一 61. 10. 31 「名生館遺跡とその歴史的背景」古川ロータリークラブ
- 進藤秋輝 62. 3. 1 「8世紀の大崎地方」古川市図書館 古川市市民郷土史講座

(7) 研究発表・執筆など

- 丹羽 茂 「宮城県における古墳時代の土器」(山形考古学会 昭和 61 年 7 月 12 日発表)
- 進藤秋輝 「多賀城創建をめぐる諸問題」『東北古代史の研究』昭和 61 年 10 月
- 進藤秋輝 「古代多賀城へのいざない」『教育宮城』昭和 62 年 1 月
- 高野芳宏・丹羽茂 「多賀城跡ー第 50・51 次調査ー」(第 13 回古代城柵官衙遺跡検討会
昭和 62 年 2 月 14 日発表)
- 白鳥良一 「東山遺跡」(第 13 回古代城柵官衙遺跡検討会 昭和 62 年 2 月 14 日発表)
- 進藤秋輝 「多賀城跡の瓦」(第 13 回古代城柵官衙遺跡検討会 昭和 62 年 2 月 15 日発表)
- 後藤秀一 「名生館遺跡の瓦」(第 13 回古代城柵官衙遺跡検討会 昭和 62 年 2 月 15 日発表)
- 菅原祥夫 「城生柵跡の瓦」(第 13 回古代城柵官衙遺跡検討会 昭和 62 年 2 月 15 日発表)

(8) そ の 他

佐々木光雄	陸奥国分寺跡整備審議会委員	志波城跡発掘調査顧問
	郡山遺跡調査指導委員	多賀城市史執筆委員
	徳丹城跡調査指導委員	
進藤秋輝	多賀城市文化財保護委員	秋田県遺跡調査専門指導委員
	石巻市史執筆委員	払田柵跡環境整備審議会委員
	閔和久上町遺跡調査指導委員	
白鳥良一	宮沢遺跡環境整備委員会委員	名生館遺跡調査指導委員
高野芳宏	多賀城市史執筆委員	
古川雅清	宮沢遺跡環境整備委員会委員	払田柵跡環境整備審議会委員
	徳丹城跡保存整備基本計画策定指導	
	史跡桧山安東氏城跡館跡保存管理計画策定専門委員	

2. 研究成果刊行物

- (1) 『多賀城跡』(宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985) 1986. 3
- (2) 『名生館遺跡 VI』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 11 冊) 1986. 3



図版1 第49次調査 SF390 築地跡（西から）



図版2 第49次調査 SF390 築地跡（東から）



図版3 第49次調査

上 SF390 築地跡南側（西から）

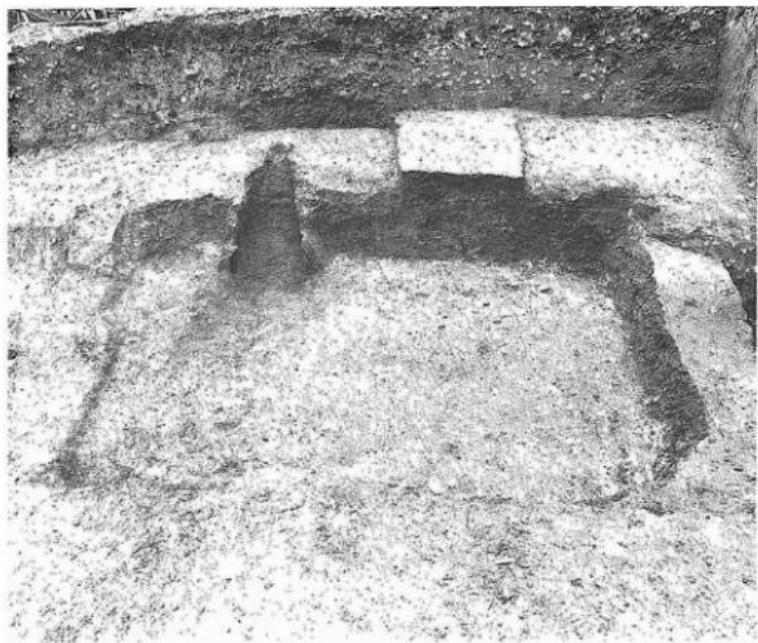
下 SF390 築地跡北側（西から）



図版4 第49次調査 上 築地本体積み手の違い（南から）
中 A-A' 断面 築地本体（西から）
下 A-A' 断面 築地南側堆積土（西から）



図版5 第49次調査 上 B-B' 断面 築地南側堆積土（西から）
中 D-D' 断面 築地本体と両側の堆積土（西から）
下 D-D' 断面 築地南側の堆積土（西から）



図版6 第49次調査

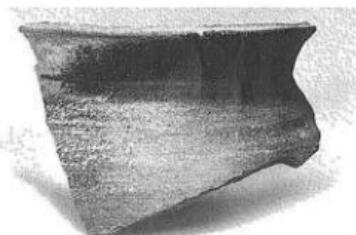
上 SI1582 住居跡（南から）

左下 SX1583 屋外カマド跡確認状況（南から）

右下 SX1583 屋外カマド跡掘り上げ状況（北から）



1



2



3



4a



4b



5a



5b



6a



6b

図版7 第49次調査

- 1.SI1582 住居跡の須恵器甕 (第11図1)
- 3.築地南第2層の須恵器杯 (第7図1)
- 5.築地南第3層の紐作り平瓦 (第9図5)

- 2.SK1583 屋外カマド跡の須恵器甕 (第12図2)
- 4.築地南第5層の輪羽口 (第7図9)
- 6.築地南第1層の紐作り平瓦 (第8図6)



図版8 第50次調査

上 調査区全景（北=政庁南門跡から）

下 調査区北半部（東から）

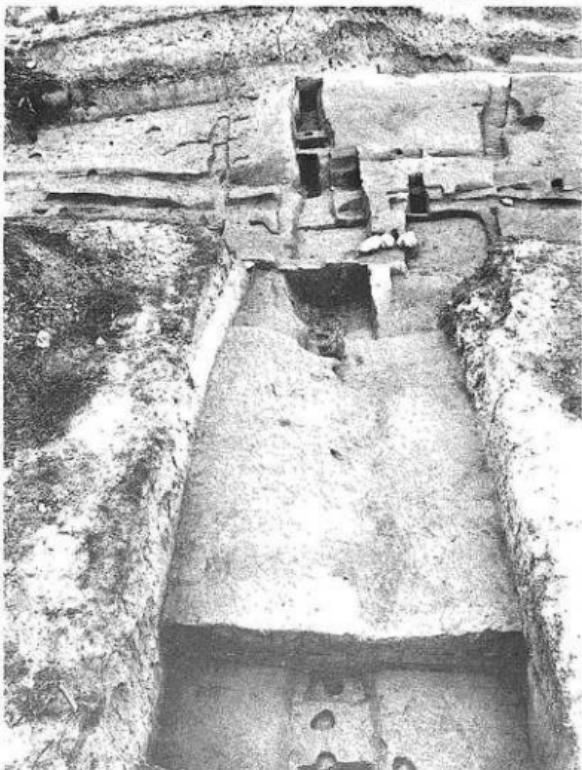


図版9 第50次調査 上 SX1604 道路跡・SA1600 墓跡（北から）
下 SX1604 道路跡（南から）



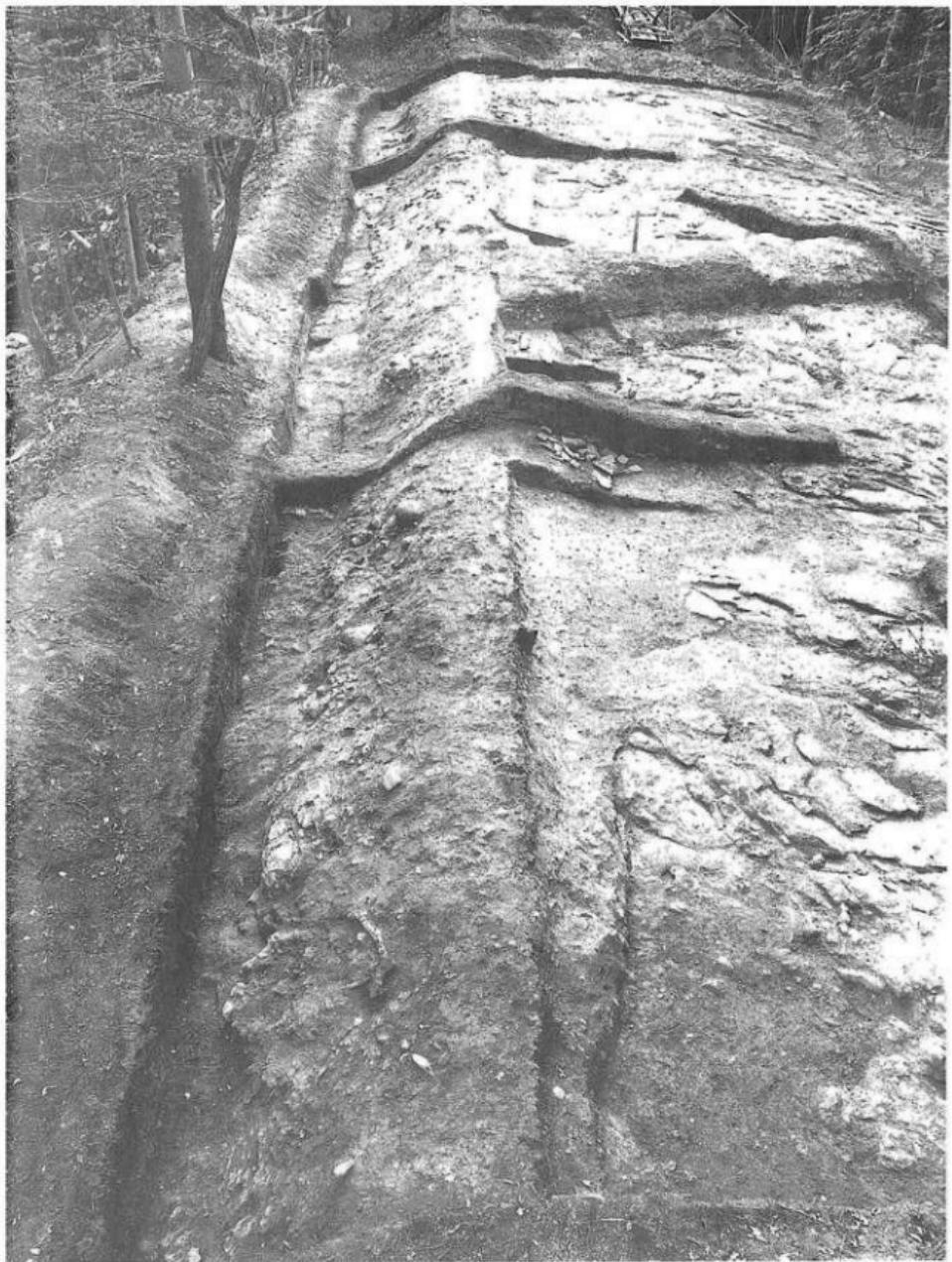
図版 10 第 50 次調査
上 調査区南半部
(北から)
下 SX1629 平場・
SB1636 建物跡
(北から)





図版 11 第 50 次調査

上 SB1559 門跡・SA1600・
SA1601 墓跡（東から）
下 SA1600 墓跡（西から）



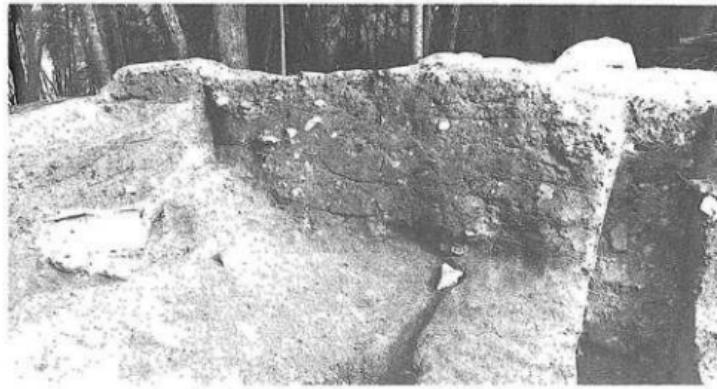
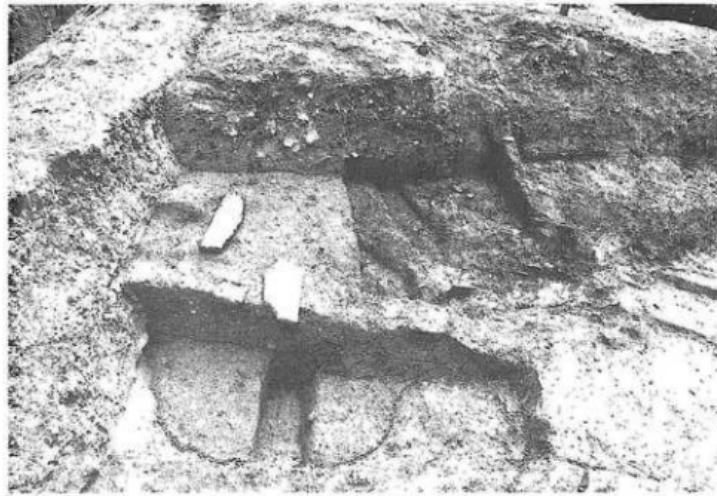
図版 12 第 51 次調査 SF380 築地跡・SF1681 築地跡（北から）



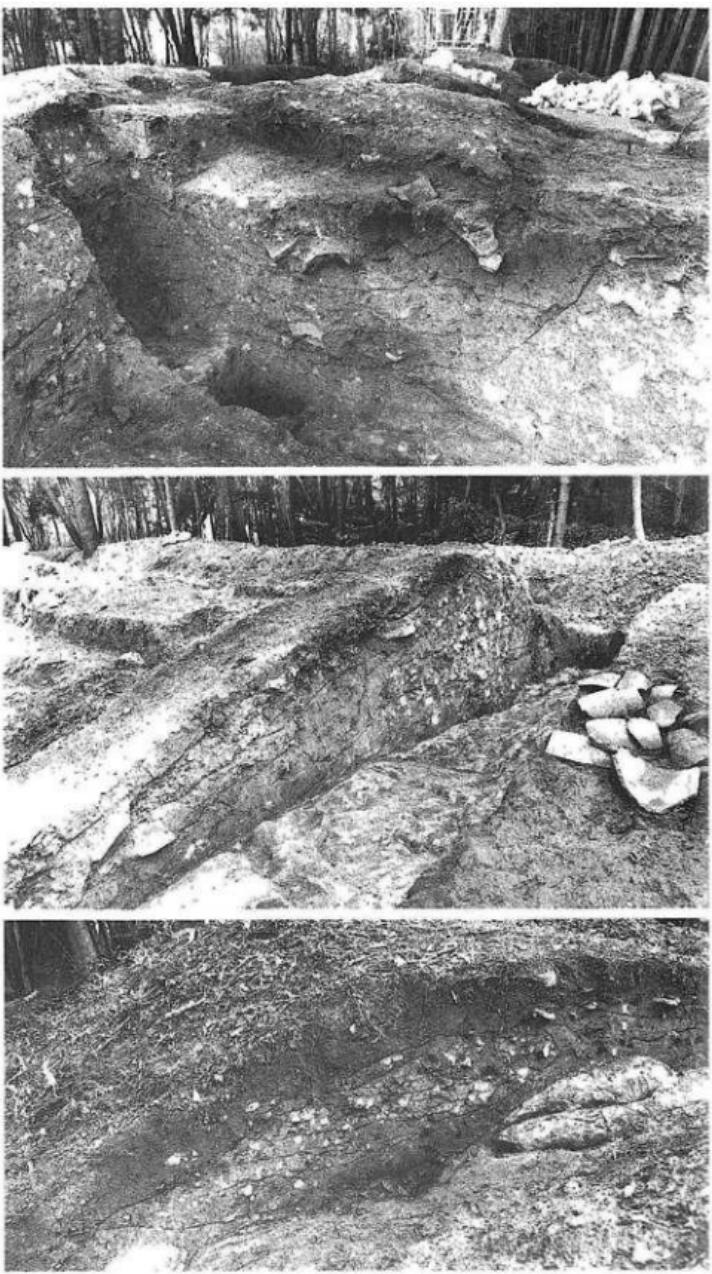
図版 13 第 51 次調査

上 SF380 築地跡（南から）

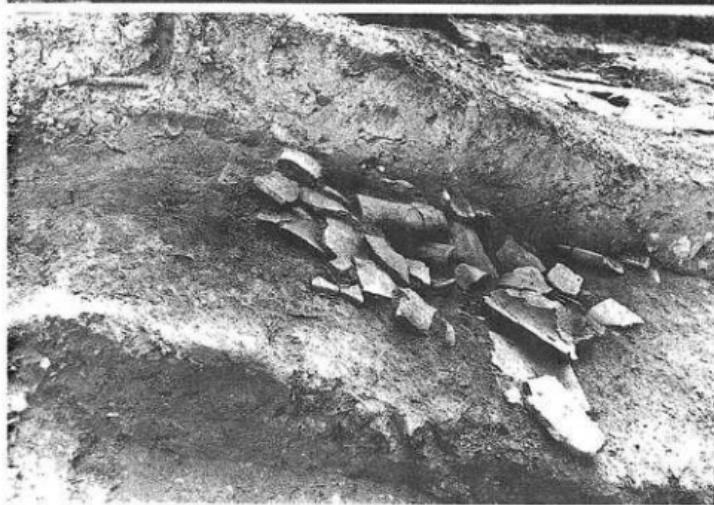
下 SF1681 築地跡（西から）



図版 14 第 51 次調査 上 SF380・1681 築地接続部北側（北から）
中 同西側（西から）
下 同南側における SF380B 築地残存部（西から）



図版 15 第 51 次調査 上 築地断ち割り断面 C-C' (南から)
中 同 D-D' (南から)
下 同 E-E' (北から)



図版 16 第 51 次調査
上 第 5 層の瓦出土状況
中 同
下 SX1695 烧骨遺構

図版 17 第 51 次調査

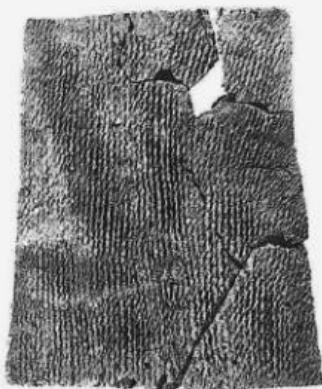
1. SF1681 築地下 X 層
出土の平瓦
2. 3. 第 5 層出土の平瓦



1a



1b



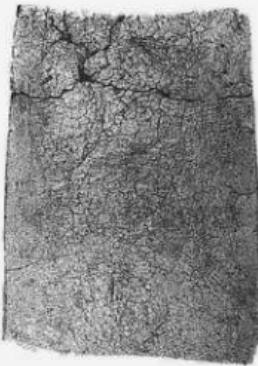
2a



2b



3a



3b



1a



1b



2a



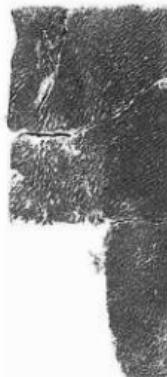
2b



3a



3b



4a

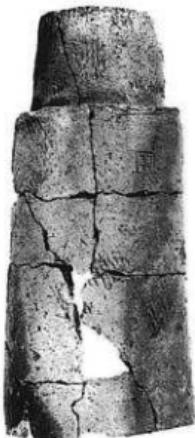


4b

図版 18 第 51 次調査

1 ~ 3. 第 5 層出土の
刻印文字平瓦

1. 刻印丸 A
2. 刻印丸 B
3. 刻印物 A
4. 烫斗瓦



1a



1b



3a



2a



2b



3b

図版 19 第 51 次調査 1～3. 第 5 層出土の刻印文字丸瓦

1. 刻印田 A
2. 刻印占
3. 刻印伊

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1986
多 賀 城 跡

昭和 62 年 3 月 25 日印刷

昭和 62 年 3 月 31 日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前 133
TEL (022) 368—0101
印刷所 小泉印刷株式会社
